
樹 守

2020

KIMORI

No. 29



一般社団法人日本樹木医会北海道支部

| | | |
|--------------------------------|--------|----|
| 特別寄稿 樹木の遺伝子情報とその利用…………… | 吉田 和正 | 1 |
| 登録更新制度の導入にあたって…………… | 豊田 栄 | 3 |
| 《新会員紹介》 | | |
| 自然案内人から樹木医へ…………… | 齋藤 保次 | 5 |
| 自然と共生する樹木医として…………… | 白鳥 桂子 | 6 |
| 樹木に携わった今までとこれから…………… | 豊島 幸信 | 7 |
| 自己紹介…………… | 吉田 一雄 | 8 |
| 初心に戻って…………… | 百海 琢司 | 9 |
| | | |
| 地域の桜を利活用（浦河町の取組）…………… | 金田 正弘 | 10 |
| 樹皮異常の樹木断面—外観から予測する内部の異常—…………… | 山上 勝治 | 14 |
| 珍しい桜の話—三題…………… | 金田 正弘 | 19 |
| [北海道外来樹種物語]スズカケノキ…………… | 真田 勝 | 24 |
| 我が故郷に想いをはせて…………… | 鮫島 宗俊 | 27 |
| 落葉松をめぐる考察ならびに篠路開基からの物語…………… | 加藤 真樹 | 30 |
| 第4回事例発表会に参加して…………… | 阿部 正太郎 | 38 |
| 令和元年度「北海道支部技術研修会」報告…………… | 阿部 正太郎 | 41 |
| 令和元年度北海道支部の活動報告…………… | 事務局 | 45 |
| 樹守（きもり）の編集と投稿方法…………… | | 48 |
| 編集後記…………… | | 49 |

表紙：浦河町西舎のオバケザクラ（撮影・提供：浦河町観光課 2019. 3. 29）
 北海道浦河町西舎の JRA 日高育成牧場敷地内にある巨大なエゾヤマザクラ（てんぐ巣病枝はこの後処理された）。
 JRA 敷地東端のオバケ沢近くにあり、周辺はシカやクマが出没しオバケも出るというので誰も近づかなかった。
 2018 年に JRA 協力業者の BTC が密生したササを伐開・除草、2019 年 11 月には JRA 協力業者及び関係者が
 一堂に会し桜の手入れを実施。その際の計測値は幹周 4. 8m で北海道内では最も太い桜となった。
 （詳細は金田氏の本文記事を参照）



樹木の遺伝子情報とその利用

森林総合研究所 北海道支所 吉田 和正

私はこれまで主として樹木のバイオテクノロジーに関する研究に携わってきましたので、その分野に関連するお話を紹介いたします。

樹木のゲノム解読

ゲノムとは、ある生物がもつすべての遺伝情報のことです。遺伝情報の実体は DNA を構成する 4 種類のヌクレオチドと呼ばれる分子の並び方です。ゲノムが解読される、つまり DNA の配列がすべてわかると、生物に含まれる遺伝子の数と種類が予測でき、生命現象のもととなる遺伝子やその変異が解析しやすくなります。例えば、イネの収量に関して、穀粒が実る枝の数を増やす遺伝子が、枝の多い系統と少ない系統のゲノムの比較から突き止められました。また、生物の系統関係を DNA 配列の違いに基づいて推定できます。さらに最近では、ゲノム編集技術を用いて特定の遺伝子を改変したときに、標的とした遺伝子以外に変化が生じた箇所がないかどうかを調べることに使われようとしています。

樹木については、2006 年に初めてポプラ (*Populus trichocarpa*) のゲノム解読が報告されて以来、これまでに 30 種以上についてゲノムが解読されています (表)。

表 ゲノムが解読された主な樹木

| 樹種 (学名) | ゲノムの大きさ ^{注)} | ゲノム解読の報告年 |
|--|-----------------------|-----------|
| ポプラ (<i>Populus trichocarpa</i>) | 4 億 8 千 5 百万 | 2006 年 |
| ブドウ (<i>Vitis vinifera</i>) | 4 億 8 千 7 百万 | 2007 年 |
| ユーカリ (<i>Eucalyptus camaldulensis</i>) | 6 億 5 千万 | 2011 年 |
| ノルウェースプルース (<i>Picea abies</i>) | 196 億 | 2013 年 |
| テーダマツ (<i>Pinus taeda</i>) | 216 億 | 2014 年 |
| ヨーロッパナラ (<i>Quercus robur</i>) | 7 億 5 千万 | 2015 年 |
| イチョウ (<i>Ginkgo biloba</i>) | 106 億 | 2016 年 |
| セイヨウトネリコ (<i>Fraxinus excelsior</i>) | 8 億 7 千 7 百万 | 2017 年 |
| エイシュウザクラ (<i>Cerasus × nudiflora</i>) | 2 億 5 千 7 百万 | 2018 年 |
| ソメイヨシノ (<i>Cerasus × yedoensis</i>) | 3 億 5 千万 | 2019 年 |

注) 染色体半数あたりの DNA の構成成分の数で表す。

2018 年に韓国の研究グループから、済州島に自生する王桜 (エイシュウザクラ、*Cerasus × nudiflora*、発表論文では *Prunus yedoensis* var. *nudiflora*) のゲノム解読の論文が発表されました¹⁾。韓国では、日本の染井吉野 (*Cerasus × yedoensis* 'Somei-yoshino') は済州島の王桜に起源があると

する主張があり、染井吉野と王桜は親種の組み合わせが異なる別の種間雑種であるという見解と対立していました。王桜のゲノム解読の論文で、王桜は染井吉野とは明確に区別できる種であるとの結果が示され、長年の論争に決着がついた形となりました。森林総合研究所と岡山理科大学の研究者が、形態や遺伝情報の新たな知見に基づいて検討し連名で公表した論文では、染井吉野はエドヒガン (*Cerasus itosakura*) とオオシマザクラ (*C. speciosa*) の、エイシュウザクラはエドヒガンとオオヤマザクラ (*C. sargentii*) のそれぞれ種間雑種であるとされています²⁾。

DNA バーコーディング

生物の種の同定は、生物多様性を研究する上で基礎となる大切な作業です。種の同定は、個体の形態的な特徴を学名の基準となった標本や記載と比較して行われますが、特徴の的確な把握や記述の解釈には習熟と最新情報の収集が必要です。そのような技術と知識を備えた分類学者が減少する一方で、生物多様性の保全に関する研究はますます重要となっています。そこで、専門家でなくても種の同定を可能とするために、特定の遺伝子の DNA 配列情報を用いた方法が発展してきました。DNA の配列は 4 種類の構成成分が一列に並んでいるものとして表すことができ、同定に利用する遺伝子の配列をそれぞれの構成成分を色分けした棒とみなして「DNA バーコード」と呼んでいます³⁾。動物では *COI* という遺伝子が、植物では葉緑体に存在する *rbcL* と *matK* という遺伝子がそれぞれ DNA バーコードとして選ばれ、国際的なプロジェクトのもとで DNA バーコードのデータベースが構築されインターネットを通じて検索システムが公開されています。そのウェブサイトは Barcode of Life Database (BOLD) Systems といい、IDENTIFICATION のタブの画面で調べたい生物試料の DNA 配列を入力して検索できるようになっています。2020 年 1 月現在、登録されている高等植物（被子植物、裸子植物、シダ植物）の種数は約 7 万種で、これは 25 万種といわれている高等植物の種の約 3 割に相当します。

スギには、春に展開する新葉が薄い黄緑色を呈する「黄金スギ」という変異種がありますが、その原因が *matK* に 19 塩基の DNA が挿入しているためであることがほぼ明らかになっています⁴⁾。*matK* の働きはよくわかっていませんが、黄金スギの葉色は季節が進むにつれて緑が濃くなることと併せて興味深いものがあります。

日本産の樹木の DNA バーコードと標本の収集も進められており、約 1,100 種とされる日本の樹種についても近い将来、DNA 情報に基づく同定が可能になると考えられます。



黄金スギの新葉

引用文献

- 1) Baek S. *et al.* (2018) Draft genome sequence of wild *Prunus yedoensis* reveals massive inter-specific hybridization between sympatric flowering cherries. *Genome Biology* **19**:127
- 2) Katsuki T., Iketani H. (2016) Nomenclature of Tokyo cherry (*Cerasus* × *yedoensis* 'Somei - yoshino', Rosaceae) and allied interspecific hybrids based on recent advances in population genetics. *Taxon* **65**:1415-1419
- 3) 神保宇嗣 他 (2008) DNA バーコーディングによる同定支援システムと JBOLI 構想. *日本生態学会誌* **58**:123-130
- 4) 渡辺敦史, 平尾知士 (2014) 針葉樹の葉緑体ゲノムを対象とした最近の研究動向. *森林遺伝育種* **3**:66-72

登録更新制度の導入にあたって

日本樹木医会 北海道支部長 豊田 栄

平成3年度に樹木医認定資格制度が発足してから29年目の令和元年度、樹木医CPD制度を活用した登録更新制度の導入が決定しました。

概要は、令和元年度以降に認定される樹木医登録者（第29期）から登録更新が義務化され、平成30年度までの認定樹木医登録者（第1～28期）については登録更新が任意であること、また登録更新の有効期間は5年で、更新には樹木医CPD単位が100単位以上必要、ということです。

導入目的については、「登録更新制度は、樹木医の対外的な信頼性を確保し、確かな技術で社会に貢献する責務を果たしていく目的で導入するもので、樹木医CPD制度によって評価・証明された継続的な知識や技術の自己研鑽の成果を対外的に示すための手段となるものである」とツリードクターNo.26並びに日本緑化センター樹木医資格登録更新の手引きに記されています。

現在、他の緑に関連する民間資格の多くは、近年の社会経済情勢の変化に伴い、すでにCPD制度と更新制度をセットで導入し、顧客のニーズに応えうる資格であることを対外的に広くPRしていますが、この点更新制度を持たなかった樹木医資格は、社会環境や社会ニーズの変化に対応出来ているという状況には至っておらず、他の民間資格に遅れをとっていました。

そこで同じ民間資格である樹木医においても、更新制のない資格は社会の信頼性を確保するのが難しいという今日の社会的な状況を踏まえ、これまで参加型プログラムのみでの運用であったため、やや低調であった樹木医CPD制度に個人申請型プログラムを備えるなど内容を整備拡充し、CPD制度を活性化して資格取得後の継続的な知識・技術の自己研鑽、資質向上への取り組み成果を外部に広く周知し、樹木医の社会的な信頼性の確保を図ることから、更新制度の導入に踏み切ったわけです。

この更新制度の導入では概ね次のようなことが期待されています。

1 樹木医業務の拡大

「今、多くの地方自治体においては、街路樹や公園樹、貴重木等の診断で、樹木医資格が仕様書に明記されるなど樹木医の活用が図られている。しかし今後は更に平成29年に国土交通省から公表された『都市公園の樹木の点検・診断に関する指針（案）』が、地方公共団体へ通知されること等により、一層の業務の拡大が見込まれる。また国の公共事業においても民間資格の登録制度の活用が進められており、更新制の導入により今以上に樹木医活用機会の拡大が期待されている。

一方民間においては、樹木医の社会的知名度の広がりがまだ十分とは言えない状況にあるものの、国や地方自治体における樹木医活用の機会が増えるにつれ、今後さらに樹木医の知名度が向上し、それが業務の拡大に繋がっていくことが考えられる」

2 情報量の増加・技術水準の向上

「現在、本部と各支部が行う各種の研修会・講習会・講演会等については、日本樹木医会のホームページで容易に見ることができるようになっている。また一部支部間においても勉強会や研修会の共同開催実施などの連携・交流が行われており、こうした状況は今後も増えていくものと

思われる。加えて日本緑化センターからも各種の情報発信が行われてきていること等から、樹木医個人がこれら様々な情報を上手に入手し、積極的に活用することによって樹木医としての知識・技術水準の向上、専門性を高めることができる」

以上が主な期待点ですが、これら期待されることはさておいて、登録更新制度では前述したように更新に必要な単位を取得しなければなりません。

これについて北海道支部では、現状、支部が行う年間行事への参加に加え、各会員の単位取得への前向きな姿勢により、更新の必要条件である「5年間で樹木医 CPD 単位 100 単位以上の取得」は可能と思われることについて、昨年末（令和元年 12 月 26 日）事務局より支部会員の皆さんへ「樹木医 CPD と登録更新について」というメールをお送りしているので参考にさせていただきたいと思えます。

ただ、更新に必要な単位取得の可能性は、メールの添付資料の通り勿論あるわけですが、北海道は広く、現在、技術研修会については札幌市内及び札幌近郊と地方都市で毎年交互に行うなど、できるだけ多くの会員が参加しやすい形で実施していますが、そうした中でも業務の都合や時間、参加費用等の面を含め、単位取得においてはかなり厳しい状況に置かれている会員が現実的にいることも否定できません。

このため支部としては、会員がより単位を取得しやすい仕組みづくりについて、今後さらに検討を重ねていく必要があります。

さて、樹木医資格の社会的評価、信頼の確保を図るべくスタートした登録更新制度ですが、この制度の導入により樹木医業務の拡大が期待される一方、社会の樹木医を見る目は、樹木の専門技術者としての期待度がこれまで以上に大きくなっていくと思われます。

このため業務を行うにあたっては樹木医として顧客に対する責任、説明責任をより意識して行う姿勢が求められます。この点からも資格取得後の継続的な自己研鑽で知識・技術を向上させ、その資質向上を図るよう努めることが大事になってきます。これは登録更新をする、しないに関わらず、樹木医としての責務でもありましょう。

ただ、樹木医の活動領域は、巨樹古木等貴重木や街路樹・公園樹、庭園樹等の診断・治療・樹勢回復、保全等の業務から環境緑化教育・自然教育等の活動まで幅広く、そこに必要とされる知識・技術も極めて深く幅広いものがあります。合わせて樹木の専門技術者として顧客からの期待度も高い場合が多く、対応が大変厳しい場合があります。こうした時、支部には樹木医に必要な知識・技術、高い専門能力を持った会員が数多くいますので、業務状況によってはそうした会員の協力を得て樹木医業務・活動を遂行し、顧客に良質な成果を提供するといったことが望ましいでしょう。

北海道支部会員が今後、社会にとってより身近な存在であり、顧客の期待に応えられるよう努めると共に、積極的に樹木医活動を展開されていくことを期待したいと思います。



自然案内人から樹木医へ

齋藤 保次 (29期)

2016年の春、28年ぶりに東京から生まれ故郷の北海道に戻って参りました。札幌出身ですが、卒業後は東京のIT企業に就職し人事教育を担当。休日にキャンプや自然観察を楽しみ、その趣味が高じて森林インストラクターの資格を平成11年に取得しました。同じ有資格者の先輩や同期メンバーとの活動は日々新鮮で、自然の見方や感じ方、木や草花はもちろんのこと、野鳥や昆虫まで多くの知識を得ることが出来ました。中でも、**3T(楽しい、ためになる、得をした)**を提供する案内技術を習得出来たことは、大きな財産となっております。

のちに都立公園のビジターセンターで勤務する機会を得て転職し、自然案内人(ネイチャーガイド)として、里山公園の管理・運営に携わるようになりました。

多岐に亘る担当業務の中でも、自然とのふれあい体験の促進、利用のための案内・情報提供は特に注力した業務であります。エコモニタリングという生き物全般の調査にも関わり、この調査データは東京都レッドデータブック編纂の資料として用いられました。

また、林野庁職員やNPO法人スタッフ、森林インストラクター養成講習会などで講師を務める機会を頂き、自身の更なる成長に繋げることが出来たことは、今でも感謝しております。

現在は、函館市内の公園樹木や街路樹の管理をしており、ここで中心となる樹木の管理業務が樹木医の必要性を意識させ、受験を後押ししました。今回、どうにか合格することができ、それと同時に周囲の期待も大きくなり、プレッシャーを感じておりますが、**安心、安全、満足**を提供できるような樹木医を目指すべく、「我以外皆我師」を肝に銘じ、日々の研鑽を怠らず、気持ち新たに多くを学び、糧として参ります。

支部の皆様、ご指導ご鞭撻の程、どうぞよろしくお願い申し上げます。



高尾山でのネイチャーガイド



都立公園での自然体験学習指導



制作した館内展示「テーマ：冬芽」

有資格：森林インストラクター、公園管理運営士、一級小型船舶操縦免許

趣味：自然観察、ヨット、蕎麦打ち、沖縄三線

著書に「楽しもう森林レクリエーション」((社)全国森林レクリエーション協会)共著



自然と共生する樹木医として

白鳥 桂子 (29 期)

第 29 期樹木医研修を修了しました、白鳥桂子と申します。仕事で樹木医の先輩方にご相談させていただくことがあり樹木医は憧れの存在でした。このたび樹木医になりたいという夢を実現させることができました。私は札幌市で環境行政、公園計画、公園や街路樹の維持管理に関する仕事をしてきました。昨春より保健所で墓園管理の仕事をしております。

私が樹木医を目指したきっかけは、ポプラの倒木現場で何もできないことに戸惑いを覚え、樹木医になって樹木診断をできるようになりたい、と思ったことです。ポプラが倒木した原因は、コフキタケの幹腐朽によるものでした。その後、平成 30 年 9 月に発生した台風 21 号及び北海道胆振東部地震の復旧作業のため、仕事で災害現場に行くことが多くあり、人は自然の脅威にはかなわないと強く感じました。台風による倒木や地震による地割れは凄まじいものであり、復旧には多くの時間と労力を要しました。災害復旧にあたり、多くの方々より助言をいただき感謝しています。

筑波での研修では、同期に北海道民が 4 人おり、仲間に恵まれ切磋琢磨しながら楽しく過ごすことができました。樹木に熱い思いを持った仲間に囲まれ過ごす日々は、学生時代に戻ったような感覚になりました。実習は筑波大学大学院の時に 2 年間で過ごした寮のすぐ近くで行われ、懐かしい思いがしました。最終日には台風が来て飛行機が欠航になったため、北海道や九州の研修生はもう一泊しなければならなくなりましたが、研修生との結束がさらに深まりました。今は Line を通じて同期と情報交換をしています。

私は幼い頃、春は山菜採り、秋はキノコ狩りに連れて行ってもらいました。また、木登りや崖登りをするおてんばな少女時代を過ごしました。愛読書はソローの「森の生活」です。高校時代に初めてこの本を読み、自然への興味と関心が高まりました。学生時代は冒険することにハマリ、大雪山の旭岳や白神山地、常念岳に登ったり、ヨーロッパやアジアへバックパッカーで一人旅に出かけたりしていました。最も印象に残っているのは、旭岳の冬山で見た風景です。青い空と真っ白な山のコントラストの美しさは今でも脳裏に焼きついています。今は子供達と公園や森へ遊びに行き、木を生かした遊びを楽しんでいます。子供達の発想は豊かで、春にはシラカバの雄花が落ちているのを拾って「ニョロニョロだー」と騒いだり、秋には落ち葉をたくさん集めてその中にダイブしたりとダイナミックな遊びをしています。子供達に樹木を通した遊びを通じて樹木への関心を深めてほしいと思っています。

これからの時代は、自然から学び、自然と共生するために、樹木の保全や維持管理をしていく必要があると考えています。北海道支部活動に参加し、諸先輩方より色々なことを教えていただきながら成長していきたいので、ご指導のほどよろしく願いいたします。

資格：中学校・高等学校教諭専修免許状（理科）、SAJ クロスカントリースキー指導員



樹木に携わった今までとこれから

豊島 幸信 (29 期)

第 29 期樹木医認定を受けました豊島幸信とよしまゆきのぶです。

札幌市北区にある造園業務全般及び樹木生産卸を行う会社に勤めております。

造園業務は緑化維持や植栽工事、冬囲い、剪定や伐採、(ダム)埋没(樹木)調査も行います。

最近はあまりに伐採の仕事が多く、かなり嫌気がさしているところですが。

樹木販売に関しては、昔から全国レベルで営んでおり、取引先は東北、関東を中心に、遠いところでは長野県、大分県まで集荷に行くこともあります。又、色々な公園や施設などにも樹木を納入させて頂きました。道内では、大きなところでは国営滝野すずらん丘陵公園や札幌市モエレ沼公園、本州では富山県中央植物園や新潟の全国緑花フェア等にも納めさせて頂きました。

しかし長い年月同じ圃場を使用していると、今まで先輩に聞いた管理法や、わずかに学んだ知識では説明のつけられない不具合が起き始めました。施肥や、排水改善、土質改良を行っても樹木の生長が良くなりませんでした。

成長不良の原因と改善の方法を色々探し、これなら原因がわかるかも？と手にしたのは、昔、一度開いたのですが内容をほとんど理解できなかった「樹木医の手引き」でした。

「手引き」で調べたところ、中耕や除草のし過ぎなどによる土壌菌類の減少では？という仮説にたどりつきました。しかし、そこまでのどりつくのに随分と長い時間がかかってしまい、多くの樹木を処分してしまいました。

樹木医資格取得の勉強を行えば効率よく生産に必要な知識を習得できると取得を目指し、昨年無事、認定を受けることが出来ました。

近年、生産業界や緑化に携わる業界は需要も少なくなり、厳しくなってきました。そんな中で、自分の樹木に携わった経験と、樹木医取得の際に得た知識をさらに磨き、もっと大きな枠で緑に関わり、盛り上げていきたいと考えています。又、名木や古木を見るのは好きなので、診断や治療にも関わりたいです。

今後は諸先輩方から知識や技術を学び、盗み、一人前の樹木医になる努力をしていきますのでどうぞよろしく願いいたします。

所有資格：1 級技能士 (造園)

趣味：釣り・山菜採り



自己紹介

吉田 一雄 (29期)

1 はじめに このたび、樹木医に認定していただきました、吉田と申します。樹木医試験は、前年不合格となり、今回二回目にしてようやく合格いたしました。わたしは、現在、函館市にあります建設コンサルタント株式会社東鵬開発に勤めております。平成31年3月に函館市役所を退職し、森林部門の技術士として再就職したところです。以前勤めておりました職場は、赤川浄水場です。そこで平成19年度から12年間、水源林担当として勤務しておりました。水源涵養保安林は聞いたことはあるが、水源林とは何か、とよく聞かれます。そこで、今回は今まで仕事をしてきた、函館水源林のことを紹介しながら自己紹介させていただきたいと思っております。

2 水源林とは 水道事業者が自ら経営する森林のことを水源林と言います。大正期から水源林経営をしていた水道局というと、東京、横浜、函館しかありません。近代水道の創設は、横浜が最初で、函館が二番目ということはみなさんご存じかと思いますが、水源林は、東京、横浜に次いで三番目に始まりました。笹流ダムの建設をきっかけに、大正8(1919)年から水源林事業が始められたのです。

3 樹木医になりたい 水源林の仕事に就いたばかりのころは、どれがトドマツで、どの木がカラマツなのかもよくわからず、そういうお前はオソマツだと、先輩から叱られました。多くの森林が山間にあるのに対して、水源林は、住宅地の隣に位置します。春、サクラの時期になりますと、手入れが悪いという苦情がきます。秋、落葉の時期になりますと、落ち葉が飛んでくるとやら、市民から苦情が多く寄せられます。それではどうすればよいかと、頭を悩ませるばかりです。それを理路整然と、解決の道筋をつけてくれたのが、(故) 斎藤 晶樹木医先生でした。ああ、先生のように樹木に詳しくなりたいと思い、あのとき感じた樹木医先生へのあこがれと敬愛が、私を樹木医に導いたと思います。その後、笹流ダム前庭広場にある老齢サクラの樹勢回復では、浅利先生、山上樹木医先生から、いろいろと教えていただきました。この仕事で得た知識と経験で樹木医受験を考えましたが、先に森林環境で技術士を取得することができました。その合格の波に乗って、昨年度から樹木医試験に臨みました。研修の最終日、樹種識別テストがありましたが、東京周辺の樹木が出題され、困惑しました。キンモクセイの匂いは嗅いだことはありませんし、どれがサカキでどれがヒサカキか見当もつかず、フウという木を見てため息をフウと吐き出すばかりでした。とにもかくにも、なんとか今年度合格したのは本当に良かったと思っております。

4 おわりに 函館水源林100周年となる令和元(2019)年に、樹木医になることができましたこと、嬉しく思っております。道南には、松前町、森町、函館と、サクラの名所のほか、名木古木がたくさんあります。こうした木々を後世に残していくためにも、早く一人前の樹木医となりますよう勉強していきたいと思っております。道南には、館 樹木医先生をはじめとして、樹木医会の先達がいっぱいいます。その道南の樹木医会に参加し、樹木医の一人として頑張りたいと思っております。今後ともどうぞよろしくお願いたします。



初心に戻って

どうかい
百海 琢司 (9期)

昨年4月に岐阜県支部から北海道支部に転入させていただき、現在道東の厚岸町で活動しています。これまで造園分野の行政機関及び教育機関で仕事をしてきました。最初は、国家公務員として国営公園整備に関わり、札幌市滝野にある国営滝野すずらん丘陵公園ではオートキャンプ場の植栽工事等を担当しました。その後、岐阜県に移り、県営広域公園の整備やのり面緑化関係の調査研究に携わり、15年前に県立園芸学校の造園緑化コースの教員となり学生の指導にあたってきました。

平成11年に樹木医資格を取得し、県営公園の植栽樹木の樹勢回復や公園イベントでのサクラ開花調整プロジェクト、岐阜県支部として取り組んだ天然記念物の樹勢診断・回復などの樹木医活動に携わり、樹木医補を目指す学生に本州で広範囲な樹木被害を及ぼしたマツ材線虫病やナラ類萎凋病などの防除実習などを指導してきました。

厚岸町では、町の樹木であるエゾヤマザクラをはじめとするサクラ類の保護育成、桜の街並み再生プランの策定に向けた提言などのミッションのもと、町管理の子野日公園を中心に活動しています。厚岸町には、皆様ご存知のように江戸時代から続く国泰寺の町天然記念物「老翁樹（エゾヤマザクラ）」など古木が多く存在しますが、近年樹勢の衰退が著しく、今後の推移が心配される状況にあります。それらすべての樹々を一人で担うには数が多く気が遠くなりそうですが、一步一步地道にサクラの樹勢回復をしていきたいと考えています。また、老翁樹の後継樹の育成や園芸品種の育成などにも積極的に取り組むつもりです。さらに、道東の湿原地域には野生のエゾノウワミズザクラが自生しており、その保護にも取り組んでいきたいと夢は膨らんでいます。

北海道支部にはサクラ類の樹勢回復や病虫害などに詳しい会員の方々が多数いらっしゃると伺っています。北海道では本州とは環境も樹種も異なるので、支部の皆様から教えていただき研鑽しながら、樹木医になった当時の初心に戻り、失敗を恐れず様々な活動に挑戦していきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

その他資格：造園技能士、造園施工管理技士、土木施工管理技士

森林インストラクター

趣味等：登山、キャンプ、釣り、植物観察

地域の桜を利活用（浦河町の取組）

金田 正弘（11期）

1. 見つかった「オバケ桜」

（イ）巨大な桜（エゾヤマザクラ）にたどり着く



オバケ桜北側の開花（2019年5月5日）



オバケ桜西側の開花（浦河町観光課提供）

浦河町西舎にある日本中央競馬会（J R A）日高育成牧場の広大な敷地内に巨大な桜（エゾヤマザクラ）があるといわれていました。2018年J R A施設担当の方から、桜の存在と観察するための周辺整備をするという話がでてきました。

巨大な桜があるという場所は、J R A敷地の東端にあるオバケ沢といわれ、シカの出没地でクマも出る、そしてオバケが出るので誰も近づくまい謎めいた所です。2019年11月、J R A協力業者のB T C、浦河町、芝生管理業者、樹木医が一堂に会し、この桜の手入れを実施することになりました。上記開花の画像は、前年（2018年）B T Cの人達がササの密生地を伐開し除草後に町観光課の方が撮影したものです。

（ロ）巨大な桜の計測（2019年3月29日）



オバケ桜の計測[幹周 4.8m 樹高 15.6m(測高器)]

道内で一番太い桜は、室蘭市幌萌の大山桜（幹周 4.15m）でした。これを大きく越える幹周 4.8m を計測した J R A 敷地内のエゾヤマザクラは、道内で一番太い桜になりました。樹冠の枝張は、幹から四方に各々 10m 均等に伸長し、樹高より枝幅が大きく、きれいな円筒形の樹姿を呈しています。

(ハ) 樹冠に広がるてんぐ巣病被害枝の切除が難しい

5 月 5 日の開花画像を見ると、樹冠頂部に大きなサクラ類てんぐ巣病（病原菌 *Taphrina wiesneri* タフリナ ウィースネリイ）が 4 箇所と内部に小さな被害枝が複数発生していました。被害枝には、花がほとんど咲かない緑の小葉が密生し、遠くからはっきり解る大変目障りな景観を呈しています。被害枝は、切除し処分すれば処置が完了です。しかし現地は、傾斜地で高所作業車の設置が困難でした。また、道路から入口に向かって高低差が 30m 程あり、くの字に折れ曲る急な坂道を登らなければ行けない地形でした。

(ニ) 巨大な桜の手入れ（2019 年 11 月 25 日）



手入れ後のオバケ桜樹姿



根系周辺の施肥

手入れは、樹冠内部のてんぐ巣病被害枝と一部枯枝等の切除、根系周辺ササ根の除去（取りきれない）及び施肥を実施しました。これに遡り J R A は、入口の急な坂の造成と桜に至る通路（L=500m 程）の造成を実施していました。通路に敷均した砂利は、ダンプカー 60 台にも及んだとか（砂利は町が支給）。いずれにしても大変な桜の手入れになりました。

(ホ) 「オバケ桜」と命名

巨大な桜は、浦河町が J R A に要請し、正式に「オバケ桜」と命名されました。2020 年 5 月の浦河桜まつりでデビューさせるようです。浦河町は「環境省自然環境局生物多様性センター巨樹・巨木林データベース」に登録を申請中です。全国のオオヤマザクラ登録木の中、オバケ桜が 3 位の太さに入る見込みです。1 本の桜に多くの時間と費用をかけることに違和感をもつ方もいるでしょう。桜を観光資源として J R A、浦河町、観光協会、町民等関係者が一丸となって推し進め、他の事業に付加価値をつけようとする取り組みとと思っています。私は今後も浦河の桜達を応援しようと思っています。

2. クルーズ船の乗客に注目された長寿桜



長寿桜を觀賞するクルーズ船の乗客
(2019年5月10日)

5月10日、浦河港に大型クルーズ船が寄港し、日高各町に観光訪問のために下船しました。乗客は、関東、関西の人達です。浦河町西舎にあるJRA所有の長寿桜（エゾヤマザクラ）を觀桜に来てくれました。この日は朝から入れ替わり3回訪れた乗客の人達にガイドを行いました。早咲きの百年桜はすでに葉桜でしたが、幸運にも遅咲きの長寿桜が何とか待っていてくれました。

クルーズ船の寄港は前からの予定で、エゾヤマザクラの觀桜ができるかどうかヤキモキしていました。クルーズ船は、毎年異なる港に寄港するとか

で、今度来るのはいつになるかわからないとの事で、返す返すもラッキー！でした。喜んでくれた乗客の皆さんに感謝しています。帰航の警笛が聞こえ、心地良く1日が過ぎました。

3. 浦河町桜まつり期間中のツアーガイド



ツアーガイドの百年桜 (2019年5月5日)

現在JRA日高育成牧場になっているこの地は、1907年日高種馬牧場として開設され、後に旧農林省日高種畜牧場として広大な敷地が管理されてきました。50数年前閉場の後はJRAが引き受け、今日に至っています。この「百年桜」は、これら歴史の証として大切に保護されてきました。

浦河町は、百年桜を観光目玉の1本として活用しています。昨年5月4日～5日に開催された「浦河桜まつり」の期間中には桜ツアーガイドを実施し、その役を務めました。

町のマイクロバス（定員20名）へ乗り込み、普段は馬の育成で立入りのできないJRA構内の桜を觀賞し、満開の百年桜を堪能することができました。改めて桜のガイドをすることで、町内外から参加の皆さんに喜んでもらえたようです。

桜ツアーガイドは、町観光協会が主催し、今後も続ける意向です。

4. 遅咲きのカスミザクラ（霞桜）の名木



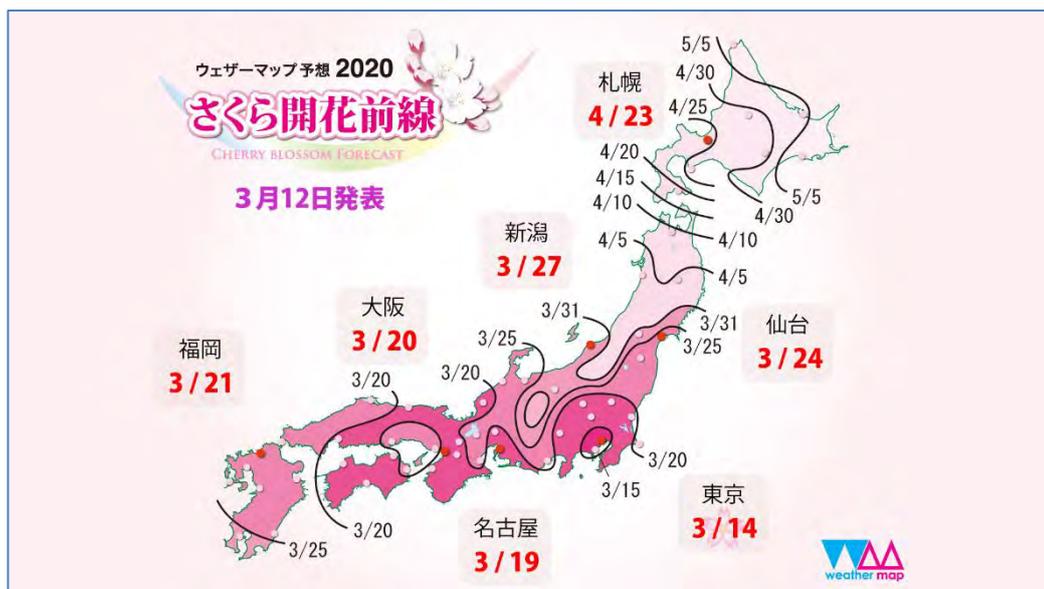
カスミザクラの開花

エゾヤマザクラより 2 週間以上遅く咲くカスミザクラ (*Cerasus leveilleana*) の大木が J R A の構内にあります。満開の樹冠は、真白で雪が降り積もったように見えます。葉、葉柄、花柄に毛があることから別名「毛山桜（ケヤマザクラ）」とも呼ばれます。

道内の人達は、色の濃い花を好み、白色のカスミザクラを桜とっていないのかもしれませんが。又、新緑時に咲くためか、尚更存在感が薄いようです。

浦河町は、大木で樹勢も良いカスミザクラを町の名木の 1 本として扱い、巨樹データベースにも登録中です（上位にランクされそう）。私もこの時期は仕事が忙しくなり、つい忘れて画像をとり損ないます。構内には、カシワの大木とカスミザクラが連理した「よりそいの桜」もあり、注目しなければなりません。

2020 の桜開花予想



提供：ウェザーマップ

樹皮異常の樹木断面—外観から予測する内部の異常—

山上 勝治 (5期)

樹木の外観診断、危険度判定を行う際に、外観の形状から内部の状態、生育経過をできるだけ正確に読み解く必要に迫られます。ただ外観から‘見えない内部’の状態を完全に読み解くことは不可能であり、推察の域を越えられません。できるだけ正解に近い結論を導き出したいと考えますが、外観の特徴が似ていても生育年数、環境によって内部の状態は異なるため、正解を導き出すのは難しく、悩ましいところでもあります。

この度、市内建物緑地に生育するソメイヨシノを伐採する機会があったので、伐採木の幹、大枝を主に特徴（部位的）のあるものを選んで、その断面との比較を試みました。ソメイヨシノは他樹種、他サクラ類に比較して生育が旺盛で肥大成長が早い樹種です。

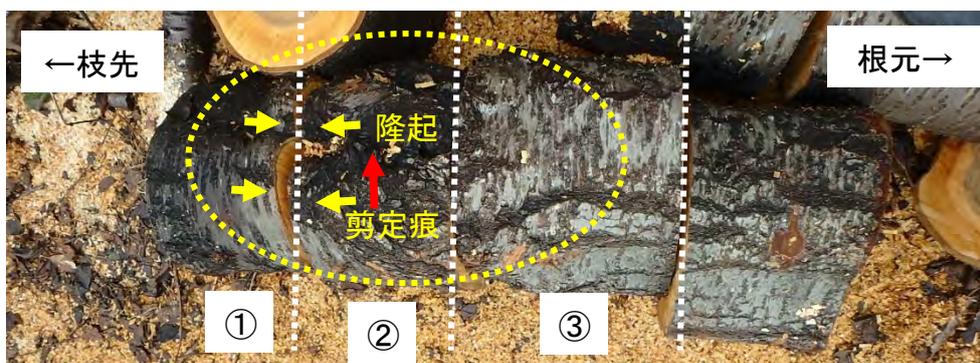
たまたま伐採木の有効利用を考え、薪わりをしている際に思いついてこの報告書を書きました。伝わりづらい部分もあるかと思いますがご容赦ください。

1. 幹 樹皮異常

1) 幹 隆起、変色

- ・剪定痕（周長比 1/3 以下）があり、剪定痕の周辺に隆起がある。
- ・剪定痕は癒合し乾燥、腐朽なし。隆起部は正常な樹皮が剥離し、表面が黒っぽく変色。
- ・剪定痕から胴枯れ性の病原菌、腐朽菌の侵入と内部腐朽の拡大が懸念される。
- ・ふくらみや部分的な隆起は、内部の異常、空洞の存在が疑われる。

【不明な点】○内部異常、残った健全部の材質、量が不明。

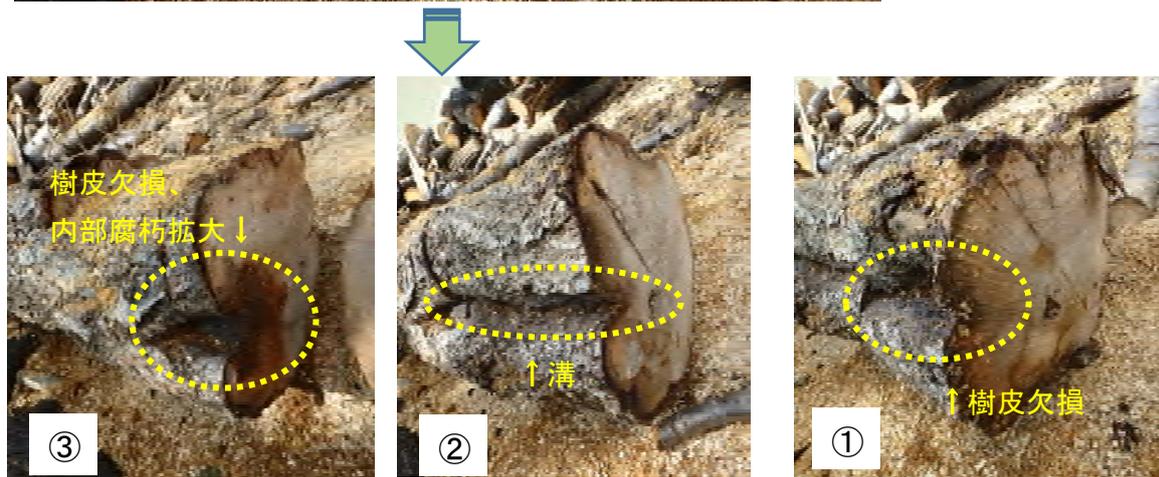
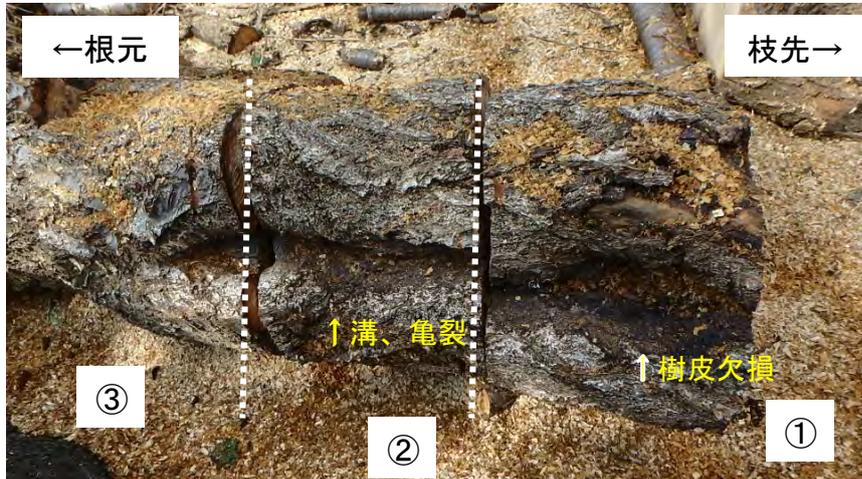


【確認結果】●剪定痕から枝組織までの腐朽が確認されるが、幹組織へ腐朽の拡大はない。

2) 溝、亀裂、樹皮欠損

- ・樹皮欠損から下部へ縦方向に溝。溝の両脇が隆起している。
- ・溝腐れ症状がある。溝は地際までは届いていない。
- ・胴枯れ性の病原菌、腐朽菌の侵入と内部腐朽の拡大が懸念される。

【不明な点】○内部異常、残った健全部の材質、量が不明。



【確認結果】●溝の下部（根元側）に進行性の内部腐朽が広がる。拡大範囲は小規模。

3) 隆起、開口空洞

- ・剪定痕の陥没、周辺材の隆起によって開口空洞化。
- ・鋼棒貫入孔あり。

【不明な点】○開口空洞内部の腐朽の広がりが懸念される。



【確認結果】●剪定痕から枝組織までの腐朽が確認されるが幹組織へ腐朽の拡大はない。

4) 樹皮欠損

- ・樹皮欠損、巻込み不良（周長比 30%未満）

【不明な点】○欠損部からの腐朽の広がりが懸念される。



【確認結果】●内部への腐朽の広がりがなし、小康状態、巻き込み再生進行中。

5) 樹皮欠損

- ・樹皮欠損、巻込み不良、材の表面腐朽破損、露出面茶褐色。
- ・胴枯れ性の病原菌、腐朽菌の侵入、材質腐朽進行。

【不明な点】○内部異常、残った健全部の材質、量が不明。

○自立のための材質、強度が不明。



【確認結果】●材の内部は放射状に変色した防御層が確認され、枯死材は支持力あり。

●表層の褐色化した腐朽部は一部軟化。

●断面の半分以上は枯死材で弾力性には欠けるが、現状では自立のための強度は残っている。

6) 樹皮欠損

- ・樹皮欠損、巻込み不良、材の表面腐朽破損、露出面灰白色。
- ・胴枯れ性の病原菌、腐朽菌の侵入、キノコ発生、材質腐朽進行。

【不明な点】○内部異常、残った健全部の材質、量が不明。

○自立のための材質、強度が不明。



【確認結果】 ●材の内部は放射状に変色した防御層が確認され、枯死材は白褐色化し一部スポンジ状となり支持力不足。

●欠損部反対側で辺材が肥大成長を続けるが腐朽菌の侵入が繰り返しある。

●材の断面比率 1/2 以上は強度不足、折損の危険が高い。

7) 樹皮欠損

- ・樹皮欠損、巻込み不良、欠損個所にキノコ（幼齢）が発生し材の一部欠損。

【不明な点】○内部異常、残った健全部の材質、量が不明。



【確認結果】 ●欠損個所から腐朽菌が侵入、内部腐朽進行、被覆材による巻き込みがあるが再生不良、変色あり。反対側に別の腐朽箇所が見られる。要経過観察。

2. 樹皮欠損、不定根、巻込み不良、大枝の枯

1) 樹皮欠損、不定根発生

露出材の腐朽進行、乾燥。
樹皮巻込み再生不良。

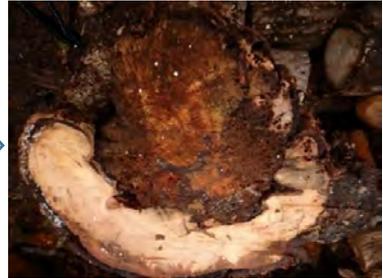
○内部腐朽の拡大、残った健全部の材質、量が不明。



2) 樹皮欠損、不定根発生

露出材の腐朽進行。
樹皮巻込み再生不良。

○内部腐朽の拡大、残った健全部の材質、量が不明。



3) 樹皮欠損、巻込み再生不良

露出材の腐朽進行、乾燥。

○内部腐朽の拡大、残った健全部の材質、量が不明。



4) 樹皮欠損、巻込み再生不良

露出材の腐朽進行、乾燥。

○内部腐朽の拡大、残った健全部の材質、量が不明。



5) 大枝枯死（切り残し）

巻込み不良

○枝の腐朽の拡大が不明

●腐朽は枝組織までで止まり
幹組織への拡大なし。



外傷に特徴のあるものをいくつか取り上げてみました。内部の状態は個々に違いますが、実際の断面を数多く見ることで内部のイメージがしやすくなります。全体樹形、打音、障害物などの点検要素を加えれば、より一層、診断の精度は増すものと考えます。

珍しい桜の話—三題

金田 正弘 (11 期)

1 釧路八重の原木を発見

(1) 原木にたどり着く経緯

同期の樹木医（日本花の会結城農場の田中秀明氏 新日本の桜の著者）から連絡が入ったのは、2019年10月の事でした。「鶴居村に釧路八重の原木がある。これを確認し、採集した穂木を農場で接木養生中」。大変驚き、事実なら大変な事だと思いました。さらに釧路市の方（緑いっぱい市民運動世話人会 浜木義雅氏）からは、「かなり衰弱していて釧路市内に移植したいが可能かどうか」とのこと。田中氏は、道内で桜類を扱っている私に見てもらえないだろうかという突然の話が飛び込んできました。

間もなくメールで画像が届きました。思わずエッ！これが原木（40年経っているはず？）。樹高4m程、幹周も50cmあるか、斜めに大きく曲がった貧相な桜の画像がありました。浜木氏は、「釧路八重の原木で間違いありません」と自信満々の様子でした。一度現地（鶴居村）に来て観てほしいということで、10月29日、根室市の帰路に立ち寄ることができました。オオヤマザクラの栽培品種、釧路八重の話です。

(2) 栽培品種の釧路八重

釧路八重 (*Cerasus sargentii* Kushiroyae) は、オオヤマザクラの栽培品種で、釧路市の稲澤六郎氏によって周辺のオオヤマザクラの実生から選抜され、1981年（38年前）種苗法による登録がなされている（現在は解除）。純粋なオオヤマザクラの栽培品種は少ない（日本の桜、勝木俊雄著より）。

(3) 釧路八重原木と確認する

根室から3時間程で釧路市内へ、ここから50分程かけて鶴居村の待ち合わせ場所に到着し、釧路八重といわれる原木を見せてもらいました。いぶかる私を察したのか、稲澤氏の娘（悦子さん、釧路市在住）と連絡をとってくれました。

「この原木は、以前に釧路市内にある公園の一角に植栽していた。市から撤去を求められ、現在の鶴居村（悦子さんの妹の敷地）に移植した。稲澤六郎氏と悦子さんは、一緒に運搬した。この桜は、間違いなく原木です」と悦子さん談。

稲澤六郎氏は、初代の釧路造園組合長の職にあった方でした。「釧路は花が少なく、赤くきれいな桜を探し歩き、種子を集めて播き育てた（そのかいあってか、釧路八重を選抜したらしい）。稲澤氏は釧路八重を接木で増やす際、うまくいかなかった。ようやく50cm程に育った接木苗は寒さのためか、ほとんどが枯死してしまった。本州に穂木を送り1m程の接木苗を作ってもらい釧路で育てた」と悦子さん談。

もっと話を聞きたかったのですが、痛々しい原木を応急処置したくて、次回に詳しく伺うことで話を終えました。

(4) 鶴居村での原木の応急処置 (2019年10月29日)



鶴居村の原木樹姿



幹部の現況



応急処置後の樹姿



幹の外科処置

釧路八重の原木は、釧路市内の造園業者によって枝切りがなされていました。所有者に了解を得て、2時間程の応急処置を実施しました。大きく曲がった反対側の幹は、深い傷跡が複数あり、根が浮き上がっていました。何かの人為的な要因で傷つき、大きく曲がり、生育が不良になったと思われます。

傷口（切口）の整形、保護処置、樹冠部枯枝除去、根系施肥を実施しました。太枝の切り跡から繋がる材の腐朽部は大きく、簡単に処置できませんでした。2020年開花時に再訪する約束をして別れました。

(5) 釧路八重原木の移植について

浜木さん達は、この桜を原木選抜ゆかりの釧路市内に移植したい希望を強くもっていました。衰弱した原木は、根切り、掘り取り、運搬に耐える樹勢を回復しなければなりません。鶴居村で余生を過ごすか、釧路に里帰りさせるか、今後の課題となりました。

(6) 浦河町で咲く釧路八重

釧路八重は、7年前から浦河町西舎に植栽しています。苗木は、十勝管内の緑化木生産者から購入したものです。エゾヤマザクラ開花より10日～2週間遅咲きのため、早咲きのエゾヤマザクラより活着、その後の生育が良いようです。ただし、枝にてんぐ巣病が発生します。



①～③ 浦河町優駿ビレッジアエル入口植栽の釧路八重（2017年5月19日に開花）

②花と葉が同時に出る。

③花の拡大（八重咲き、菊咲き？）

2 アーコレードという名前の桜

(1) 秋に咲いた（二季咲き）アーコレード

浦河町観光課の方から「アーコレードが11月に咲きました」と弾む声で連絡があり、画像も送ってきました。やった！ 即座に15年前の事を思い出しました。



秋に咲いたアーコレード（2019年11月17日）

私は兵庫県西脇市の学校グラウンド沿いに植栽されていた飛び切り美しい桜並木を見せてもらった際、これなんという桜？ 答え「アーコレード。きれいやろ。秋にも咲くんやで。でも北海道で秋咲きは無理やな」。以来、アーコレードを自分のフィールドに植えたい。この桜を追い求めることになりました。

(2) 浦河町にアーコレードを植える



アーコレードの開花（2019年5月5日優駿ビレッジアエル中庭）

優駿ビレッジアエルの中庭には、元々あったエゾヤマザクラに加えて、10種類のサトザクラを植栽しています。その中の1つ、アーコレードは、7年前、接木1年生の苗木を植えたのが始まりです。毎年この苗木を植え、現在15本のアーコレードが育っています。

アーコレード (*Cerasus* ‘*Accolade*’) はイギリス人がオオヤマザクラとコヒガンを交配させ、日本に逆輸入された栽培品種です。半八重咲き（花びらが10枚程）でピンク色が濃く、大きめの花を咲かせます。浦河町では、エゾヤマザクラ、チシマザクラより早く咲き、花期が長く楽しめます。樹高はあまり大きくならず横に広がるようです。丈夫に育ちますが、枝にてんぐ巢病が発生します。エゾヤマザクラに発生するサクラ類こぶ病が感染しないか注視しています。エゾシカ、野ウサギには大好物のようで、獣害要注意です。

(3) 新たな名所作りにアーコレードを



アーコレードのてんぐ巢病（黒矢印）

道内では、花色の濃い桜に人気が集まるようです。花付きが良く、花色も濃く、花が大きい八重系のアーコレードは、理想的なサトザクラと思っています。市場性もあり、新しく桜植栽地造成の際導入したいお薦めの桜です。

苫小牧市内の造園屋さん及び由仁町桜の会に苗木を提供しましたが、シカ等の食害を受けたようです（室蘭市内で咲いています、との報告あり）。

アーコレードは、日本花の会結城農場で苗木を作っています。道内に会員がいますので、どこかに植

えられている可能性があります。ご存じの方はご一報を。

私のフィールドでは、浦河の他に小樽朝里川宏楽園で育っています。

アーコレードは、海岸付近が不向きなようで、内陸向きです。札幌、恵庭、旭川、帯広近辺の皆様、寒さに強く、成長の早いアーコレードに注目してみてもいいかもしれません。

3 苫小牧市小泉の沢川沿いにある枝垂れ性のエゾヤマザクラ



- ① 開花した枝垂れ性のエゾヤマザクラ
- ② 花の拡大 (2019年5月9日)
- ③ 4年目の接木苗 (5月16日)

シダレオオヤマザクラ *Cerasus sargentii* (R.) H.Ohba *f.pendula* (H.) Ohba は以前にも取り上げました。①の穂木を採集し日本花の会の田中氏に接木してもらい里帰りした苗が、③のようになりました。この幼木は、まだ開花を見ていません。本当に枝垂れているか、まだ解りません。花の会の品種登録申請書が手元にあるのですが、もう少し観察が続きます。

[北海道外来樹種物語]

スズカケノキ（プラタナス）

Platanus orientalis スズカケノキ科 スズカケノキ属

真 田 勝（8期）

プラタナス (*Platanus*) はスズカケノキ科スズカケノキ属に属する植物の総称で、スズカケノキ属は北半球のみに自生する樹木で、1属からなり種の数は少なく7~8種、そのうち4種が北米からメキシコにあり、残りは西アジアを中心に南欧から東インドの地域に分布しています。

多くは30~50mに育つ大型の落葉高木で、葉は掌状に裂け長い葉柄があり、葉柄の基部の中に翌年の芽が包まれています。これを「葉柄内芽」といい、在来樹ではキハダ、ヌルデ、ハクウンボク、ウリノキなどがあります。

日本では主にスズカケノキ (*Platanus orientalis*)、アメリカスズカケノキ (*Platanus occidentalis*)およびモミジ (カエデ) バスズカケノキ (*Platanus acerifolia*) の3種が見られますが、多くの街路樹などはモミジバスズカケノキです。それは最初に新宿御苑などに持ち込まれたのがモミジバスズカケノキであったためで、これはスズカケノキとアメリカスズカケノキの交雑種といわれ、選抜固定されたもので樹姿と葉の美しさはスズカケノキの性質を継ぎ、強さと成長の早さはアメリカスズカケノキに劣らないといわれています。

日本に渡来したのは明治8~9年(1875)頃らしく、東京の新宿御苑、小石川植物園、目黒の林業試験場(現林試の森公園)の3か所に植えられたのが始まりで、公園や街路樹に植えられたのは明治37年(1904)に日比谷公園(林業試験場より調達)に植えられたのが最初といわれています。また明治39年(1906)に完成した新宿御苑のフランス式整形庭園にもプラタナス並木が200mにわたり植えられ、フランスを思わせるロマンチックな並木として親しまれています。

成長が早くて大型の葉が美しく、広い日陰を作ることから明治44年(1911)から本格的に街路樹に取り入れられ、間もなく札幌にも移入されました。街路樹として札幌に植えられたのは昭和12年(1937)、大通西5丁目に植えられたのが最初で、ついで昭和15年(1940)に修道女たちによって植えられたといわれる天使病院前の並木などがあります。



モミジバスズカケノキの葉と集合果



最初の街路樹と言われるモミジバスズカケノキ
(大通り公園西6丁目)

また、これより前に単木的に植えられたと見られる大木が札幌市大通公園や中央区の山鼻公園などに見られ、中でも山鼻公園には自然樹形の大木が4本あります。最も大きいものは樹高25m、胸高直径132cmの巨木でほぼ真円の樹冠を大きく広げ、いかにも古木の風格があります。植栽年は不明ですが山鼻公園の開設が古く、明治27年(1894)には「山鼻兵村開設碑」が建立されています。当時の名称は現在と異なりますが広場があり、東京で本格的な街路樹として植えられた後の大正時代に植えられたものと推察され、山鼻公園の標柱の裏にはモミジバズカケノキの葉が描かれています。



最も古いと目されるモミジバズカケノキ
(左後方にも、山鼻公園)



山鼻公園の標柱 (左側表・右側裏)

プラタナスは葉が大きく木陰を大きく作ることから行道樹として古代ギリシャ時代から道路沿いに植えられ、それが街路樹の始まりといわれ、世界4大街路樹(プラタナス、トチノキ、ニレ、シナノキ)の筆頭にあり、世界各地に植えられています。北限と言われていた札幌でも五番目に多い樹種となって市内各地に植えられています。霜害

に弱いことから寒冷地では育ちにくいと言われていましたが、今では旭川市の神楽岡公園通りには3kmにわたり植えられており、別名を「プラタナス並木路」「ロマンティック街道」と呼ばれ、道路上に覆いかぶさる「緑のトンネル」になっているといえます。

プラタナスの和名はいろいろあり一般には「ズカケノキ」といわれています。球状果が垂れ下がる姿を山伏や弁慶が首にかける球状の襟飾りに見立てたものですが、この襟飾りは結袈裟ゆいけさまと呼ばれるもので、これをその下に着る袴懸衣すずかけこどもと誤って名付けられたといわれています。また「哲学の木」ともいわれ、古代ギリシャ、アテネのアカデミーではプラタナスの木陰でプラトンやアリストテレスが哲学を講義したところからといわれています。♪友と語らん鈴懸の径♪と歌われた立教大学の並木も哲学を彷彿させ記念碑も建てられているようです。アメリカではボタンウッドといわれ「釦の木」ともいわれます。



モミジバズカケノキの木肌

プラタナスは何とんでも木肌に特徴があり、あたかも自衛隊が着る迷彩服に似ていることから「自衛隊の木」と呼ばれることもあります。

プラタナスは樹姿が美しく、成長が早くほこりやスモッグなど公害に強く、病虫害も少ないことなどから街路樹や公園樹として多く用いられています。また挿し木による増殖が容易(高校の実習で経験あり)

なことも一つの要因と考えられます。病虫害が少ないといわれていますが平成 18 年（2006）6 月に新梢が枯れる現象が札幌市内全域で見られました。これまで経験したことのない症状で、その原因解明に札幌市公園緑化協会は道立林業試験場の協力も得て、炭疽病であることを突き止め、その原因は気候不順により十分な抵抗性を獲得できていなかったためと結論づけられたことを記しておきます。（樹守：16・22 号参照）

プラタナスの語源はギリシャ語の Platys（広い）の意で、大きな葉を意味し、大きな日陰を作ることから街路樹に多く使われているのですが、近ごろはこの大きな葉が災いし、秋の落葉が大変とプラタナス街路樹周辺の住民から苦情があるら



早期剪定により乾燥皮焼けで枯死に至る

しく、管理者は仕方なく落葉前に剪定してしまう傾向にあり、早いところでは 9 月中旬から剪定作業に入り、プラタナスやイチョウの黄葉を見ることなく切り取られる受難の街路樹もみられます。樹木生理から見ればせっかく作った同化産物を樹体に貯蔵することなく衰退することになります。街路樹を守るため落ち葉の清掃など地域住民のご理解・協力は得られないものでしょうか。

スズカケノキとプラタナスその呼び方によってイメージが異なり、スズカケノキと聞けば初冬の青空に鈴のような実が垂れ下がる景色が、そして昭和 17 年（1942）に発売された灰田勝彦の「鈴懸の径」の歌とともに学園キャンパスや友との語らいが浮かび上がります。また昭和 30 年（1955）には♪すずかけの並木を遠回りして帰ろう♪と歌われた菅原都都子の「月がとっても青いから」はなんともロマンティックなすずかけの並木道を思いださせます。一方、プラタナスと聞けば青々と茂った並木道が浮かぶのです。

山本五男氏の「樹木と歌謡曲」によれば曲名にスズカケノキが出てくるのは 15 曲あり、プラタナスはわずか 2 曲にとどまり、プラタナスでは歌にならないようです。（ツリードクター 21 号）

【参考・引用文献】

- 1) 林弥栄：有用樹木図説，成文堂新光社，1968。
 - 2) 朝日新聞社編：北方植物園，1975。
 - 3) 世界の植物：朝日新聞社，1978。
 - 4) 村野紀雄：札幌の並木，北大図書刊行会，1982。
 - 5) 山本五男：樹木と歌謡曲，ツリードクター 21，2014。
 - 6) 荒川克郎：2006 年 6 月プラタナス新梢枯死について，樹守 16，2007。
 - 7) 川口治彦：プラタナス炭疽病発生から 6 年余，その後におもうこと，樹守 22，2013。
- ほかネット参照多数。



炭疽病に罹ったプラタナス（2006）
（黒いところは枯れた新梢）

我が故郷に想いをはせて

鮫島 宗俊（16期）



火山灰に煙る桜島

故郷を離れて半世紀が過ぎてしまった。造園の仕事に携わり 50 年、月日の経つのは今思えば早いものである。しかしいつも忘れられないのが故郷である。北海道に来てから約 40 年。故郷を離れて 50 年。唄の文句ではないが「思えば遠くに来たもんだ」と思う今日この頃でもある。

私が生まれたのは九州薩摩、鹿児島県加世田市。昭和 29 年に加世田町と万世町が合併し、加世田市となった。さらに平成 17 年の市町村合併では加世田市、金峰町、大浦町、笠沙町、坊津町の 1 市 4 町が纏まり「南さつま市」となったため、現在は「南さつま市」出身と名乗っている。

南さつま市は薩摩半島の南西部に位置し、鹿児島市から車で約 1 時間の距離にある典型的な半農半漁の町であった。東経 130 度 19 分、北緯 31 度 24 分に位置し、北は鹿児島市、日置市、東は枕崎市、南九州市と接しており南側、西側は東シナ海に面している。総面積は 283, 59 km²で鹿児島県の 3.1%を占めている。東シナ海に面した北西部の海岸線は日本三大砂丘に挙げられる吹上浜という砂丘地帯を形成し、南西部は変化に富んだリアス式海岸となっている。さらに国の名勝「坊津」及び坊野間県立自然公園の指定を受けた景勝地があり、南さつま市の総面積の 58.9%が森林で中小の山々が連なり、平野は河川流域に沿って開けている。土壌はシラス台地で霧島桜島の噴火による火山灰台地となっている。気候的には年間平均気温 20.7℃、年間平均降雨量は 2, 155mm で温暖多雨な地域となっている。人口は少し古い数値であるが 2011 年調査で 39, 012 人である。

歴史的にみると柁(かこい)ノ原遺跡から隆帯文土器と言われる日本最古(約 12, 000 年前)の土器の一つが発見されている。また縄文文化期の船形配石炉、煙道付炉穴、集石等や岩偶が見つかった遺跡が残っている街でもある。さらに平安時代後期荘園の役人として別府五郎忠明が加世田に入国し別府城を築き、その後別府氏が 230 年にわたり当地を治めたと記録されている。

室町時代応永 2 年(1420)、島津氏が加世田に入国し、この後戦国時代に入り島津一族の勢力争いの末、島津忠良が別府城を攻め落とし加世田を治め島津日新公として、又島津家中興の祖とし

て加世田を治めた為、島津家の直轄地として明治まで続いた。九州統一を果たした島津義久は忠良の孫にあたる。江戸時代薩摩藩の外城となり江戸時代中期に郷と改められ加世田郷となる。現在地元の酒造会社でも加世田郷の銘柄で生産販売されている。江戸時代中期当時坊津は密貿易の拠点として薩摩藩が直接支配していた様である。郷の中心が麓集落であり薩摩藩の出先機関である地頭仮屋が設置された。明治時代に入り廃藩置県に伴い加世田郷は加世田村となり近隣の地域を取りまとめた郡役所が設置された。大正 3 年に薩摩半島で最初に鉄道が開通し加世田から伊集院の間を走り始め、南薩鉄道として親しまれたが昭和 58 年に廃線となった。

太平洋戦争の終わりには陸軍の特攻基地として万世飛行場が建設され、約 200 人の特攻隊員が出撃していった。知覧にある海軍の特攻基地があまりにも有名なためと陸軍の最後の特攻基地の為、人知れず幻の特攻基地とも呼ばれている。

万世飛行場は昭和 18 年 7 月に着工、昭和 19 年末には完成し、昭和 20 年 4 月から約 50 回出撃した。



万世特攻基地記念館(建物全体が飛行機をイメージした建築となっている)



特攻隊員像



平和祈念館

文化的には竹田神社における六月灯での「からくり人形（水車を利用した回転人形）」や鎧兜の武士の格好で踊る土踊り、元服前の子供が踊る稚児踊りが奉納される。最近では自転車競技や吹上浜の砂を利用した砂の祭典で砂像が作成され、県内外からの観光客の誘致に役立っている。さらに砂像実行委員会では旭川の雪まつりにも参加して旭川市との交流が続いている。



砂で作ったオブジェ



大砂像



大砂像



吹上浜にかかるレインボーブリッジ

以上、「故郷は遠くにありて思うもの」との例えではあるが望郷の念に取りつかれた年齢となったのであろうか。

会員の皆様が鹿児島までいかれたらぜひ「南さつま市」に立ち寄り、観光していただければと思います。

(南さつま市広報誌を参考)

落葉松をめぐる考察ならびに篠路開基からの物語

加藤 真樹 (24 期)

最近ずっと北海道の歴史を学んでいる。樹木のことだけでなく、アイヌや開拓民たちの文化や物語をもっと知ろうと、日々様々な資料を読み、その成果を文章で表現できたらと思っている。経済成長と共に、開発で次々と過去の景色、施設や遺物が失われ、高層ビルやマンション、商業施設や住宅が溢れ、開拓から 200 年にも満たない間に急速に姿を変えた現在の街並みに、まだ自然が豊かだった頃の姿を復元できたらと思っている。

今回の話は落葉松に関するものだ。北海道で落葉松といえばカラマツを意味することが多い。元々自生していたものはなく、今ある公園や防風林、造林地のカラマツはすべて本州から、そのほとんどは信州から持って来たものだ。

去年の夏だが、『シノロ～140 年のあゆみ～』*1 読んでいて、興味深い文章を見つけた。それは昭和初期の話で、石狩郡篠路村(現札幌市北区篠路)に人々が娯楽や会合で集まれる施設を建てるという計画が持ち上がり、その建物を地元の落葉松、つまりカラマツを使って造ったというものだ。建てられた施設「共楽館」は、幅 9m 奥行 22m、一部客席が中二階にあり、全体で 500 人ほどが入れたというから、結構な数の材が使われたことになる。それを提供したのが、今の篠路駅前通りに面した旧琴似川のほとりにあった落葉松だという。この話は昭和九(1934)年であり、建物の材として使えるまでには 50 年ほどの樹齢が必要であるとすれば、1880 年代(明治十三～二十三)年頃に篠路に持ち込まれたものと考えていいかもしれない。

『カラマツが来た道』*2によれば、札幌に初めてカラマツが植えられたのは、円山とある。正確な献木年は不詳だが、明治十年代に札幌神社(現北海道神宮)の社殿門前に数本植えられたという。当時の入植者たちの中で、個人で植栽を試みた者はいたが、あまり拡がらなかったという。彼らはカラマツの苗木や種子を、開拓使や北海道庁の植樹奨励により無償下付を受け、神社や学校施設、防風林や並木の造成、戦勝記念などで植栽した。また自ら種子、苗木を取り寄せたりもした。

長野県の育苗生産者が残した記録でも、明治十三(1880)年に初めてカラマツ種子を北海道に送り、圓(円)山^{びょうほ}苗圃に試験的に播種したとある。その年は、ちょうど開拓使が札幌区に「圓(円)山養樹園」を開設した年に当たる。場所は今の円山公園約 22ha、ちょうど坂下グラウンド、動物園と周辺の森林、野球場などを含む範囲だ。播種した苗圃は、平坦地の一部、円山公園正門入口から入った小河川と、池で整備された区域と坂下グラウンド辺りを使用していた。

圓山養樹園では様々な樹種を試植し、そんな中、クヌギ、クロマツ、スギ、カラマツの 4 種については成績が良好だった。育成されたのは約 30 万 9 千本、21 樹種。主な内訳を見ると、ウルシ 20 万本、ニセアカシア、アカマツ各 1 万本、クロマツ 9 千本、カラマツは 535 本などである。その後は苗圃管理所を作り、苗木の払い下げを行った。苗圃としてはやや狭く、水はけも悪かったようだ。結局、圓山養樹園は明治三十六(1903)年に札幌区に払い下げられ、今日の円山公園となった。

また、長野県の育苗生産者が、カラマツの普及指導のため本道に度々来ていたことも分っている。他にも明治十七(1884)年、札幌区圓山村に長野県諏訪出身の入植者がいて、三年生カラマツを郷里から千本送ってもらっている。ところが運送に 20 日程かかったため、2 百本だけが生き残

っていたと言われる。そして自宅の周りや養樹園、札幌神社境内などに植えたところ、良好な成長だったので、養樹園主任の依頼でさらにカラマツ種子 3 升(約 4.5 キロ)を郷里の信州から取り寄せ、明治十八(1885)年に播種した。

と、カラマツの導入当初にまつわる話は色々あるが、どれも圓(円)山の話ばかりで、篠路へ持ち込まれたという話は出てこない。共楽館が建てられたのが昭和九(1934)年だから 5~60 年生のものを使ったとすれば、遡って計算すれば 1880 年前後となり、時期的にちょうどいい。そうすると考えられるのは、圓(円)山で試植したり、啓蒙、普及活動がされていた時期に、誰かが篠路へ苗木を運んだのではないかということだ。進取の気性に富んだ人物が旧琴似川沿い、今の篠路駅前通りの辺りにたくさんのカラマツを植樹した、となる。

札幌が北海道の中心都市として開発が進められるのは、今から 150 年も前のことだ。それ以前は、アイヌが豊平川や発寒川、琴似川のほとりに多少住んでいたが、その数はまばらだった。1857 年に琴似村、66 年に札幌村へ幕府の者が入地したがまだわずかだった。時代が大きく変わり明治になると、新政府主導で静かな原野が徐々に切り開かれていく。開拓判官^{しまよしたけ}島義勇が円山の丘から市街地を見下ろし、将来の街づくりの構想を描いたのもこの時期だ。

札幌で本格的に開墾が始まったのは、明治三(1870)年に奥羽(東北)地方から旧士族と農民 589 戸、1374 人が渡って来た時からである。そのうちの 96 戸、298 人は庄内出身者で、30 戸が円山に、他の 30 戸が丘珠に、36 戸が苗穂に入植した。その翌年、岩手から 80 戸が渡り、花畔に 20 戸、篠路に 10 戸、円山に 6 戸、そして月寒に 44 戸と、それぞれ希望するところに入地した*3。彼らは未開の樹林だった平地を切り開き、やがて掘立小屋や家屋を建て、畑を作った。そして大工などの労働者が呼ばれ、官営の施設、工場が建ち始めた。また所々で新道開設、堀の掘削工事なども行われた。

一方の篠路はどんな状態だったろうか。その歴史は、古くは石狩川下流にアイヌがいた頃から記録が見られる。当時はやはり原始林で、やがて場所請負人がやって来て、次に幕府から派遣された役人が訪れ、開発を進めるようになる。それが明治二(1869)年、札幌に開拓使が置かれると、篠路は札幌中心部への物資輸送の中継地となる。当時の交通は道路でなく、海上運輸か、海岸線に頼り、奥地(札幌中心部)へは川沿いを利用するしかなかった。つまり本州からの荷は、小樽まで船で運ばれ、そこから札幌へは陸路ではなく、さらに船で石狩から石狩川を上り^{ほらと}茨戸まで運ばれ、茨戸から篠路を経て、^{ふしこ}伏籠川沿いを現在の北四条東一丁目附近に到達するのである。さらに札幌に人が集まるようになると、大量の生活物資が必要となる。やがて篠路には倉庫や駅通が建てられた。

ただ、篠路に入植者たちが増えるのは明治二十年代である。人口動態でも明治の初めから十年代は平穏なまま過ぎている。札幌市にはどんどん人が入り、開拓されて行ったが、その周縁部である篠路の開発が進むのはそれからしばらく経ってからだ。そして交通の要所でありながら、入植者もそれほど多くなく、静かな営みが繰り返されていた日々において、旧琴似川の岸に多くの落葉松(カラマツ)が植えられたこととなる。

では、そこにどのような物語があったのだろうか。残念ながら篠路に正式な記録として残っているわけではなく、あくまで推察に過ぎないが、鍵を握る人物がいる。円山と篠路を結ぶ線上に

浮かぶ人物、それは一人の開拓移民である。文化十四（1817）年に磐城国白川郡米村（現福島県西白河郡西郷村）に農家の三男として生まれ、長い間定職に就かず、根無し草のように全国を流転し、いつの間にか故郷から遠く離れた北の大地までやって来ていた男。彼こそが、この物語の主人公である。

篠路の歴史で最初に大きな役割を果たすのは、石狩場所調役荒井金助である。時は幕末、ロシアの南下政策や諸外国船の来航により、蝦夷地の重要性が高まり、調査や開拓が急ピッチで進められていた。当時アイヌは主に漁業で暮らしていた。ただ和人との関係は悪く、金助はそれを改善しようと努力した。他にも漁業の運営などで改革を行い、石狩の発展、繁栄に大いに貢献した。札幌圏の教育の始まりは、安政四（1857）年に金助が石狩に建てた教導館からといわれる。そして西蝦夷地経営を進める上で、彼はその周辺の土地を巡検することになった。

金助はその中で一人の男に出会った。琴似川に住む小作人だった。まだハルニレやヤチダモなど原始林が残り、開墾もままならない土地で、男は農作業に勤しみ、秋にはしっかりと収穫を得ていた。安政四年に移住して以来、伐採、抜根、土起しと大変な重労働だったが、朝早くから体を動かし、額に汗し、弛むことなく日々頑張り続けた。翌年には米作りも成功させた。札幌の米作りのはしりである*4。当時は箱館でもよい成績が得られていないのに、これだけ立派に収穫できるとはと幕府に賞賛され、産米功労者として金一両二分を下賜されている。

金助は男に指示し、他にも農業が可能な土地がないか調査させた。すると篠路という土地が適しているという答えが返ってきた。

やがて金助は篠路に荒井村を開き、男にも入地を勧めた。すると万延元（1860）年、男は琴似の開墾地を雇人に与え、旧琴似川と伏籠川の合流地（篠路太）に移り住んだ。そして荒野を切り開き、50 アール（5000 m²）の土地に主にそばを蒔いた。彼はここでも水田を試した。文久元（1861）年から元治元（1864）年までに 24 アール（2400 m²）の水田を作り、四年間で粃 15 石（2.25t）を貯えた。ところが慶応元（1865）年の水害で種粃を全部流してしまい、その上石狩地方は明治の初めにかけて毎年の天候不順で凶作が続き、また水位確保の問題もあり、水田作りも中止となった。

明治維新になり、大改革の波は札幌周辺の幕吏や藩籍のある士族の農民にまで影響を与えた。時に箱館戦争などに駆り出され、開拓した農地は再び荒野となった。また凶作続きで村を離れた者も多かった。しかし、彼はこうした災難や不運、時代の移り変わりにも流されず、立派に開拓者の務めを果たした。自らの土地 5ha（5 万 m²）余りを守り、残りの農民を励まし、指導を続けた。この男こそが篠路開基の人物、早山清太郎である。

彼は明治五（1872）年に篠路教育所の認可を得て、校舎を建てている。これは今の篠路小学校で、教具なども寄付している。

明治八（1875）年には郵便局の前身ともいえるべき駅通が設けられ、その取扱を命じられた。彼は往来する高官たちに不便がないようにと立派な旅舎を建てた。何かと開拓使の御用を任せられ、松本十郎判官*5も清太郎の世話になることが少なくなかった。

彼は他にも自費で何本か橋を造り、人々のために尽力した。それだけでなく道路開削にも大いに貢献した。彼はなぜか道路を 25 本造れば神仏の名利に叶うと信じていて、篠路村を中心に開削を続けた。その異常ともいえる情熱で出費がかさみ、しまいには資産のほとんどを失いかねないまでであった。そして実際 25 本の道路を完成させている。

明治十三(1880)年七月には本村六十四番に篠路郵便局が設置されると、初代取扱人に任命されている。

そんな献身的な経歴において、彼は明治二(1869)年に開拓使の使掌ししやうに任じられている。御宮地所並開墾・新道・新川集地掛というややこしい職名で、要は道路やその他用地の調査や案内を命ぜられ、その中で札幌神社(現北海道神宮)の選定という重要な任務を担うことになった。その時に役立ったのが、安政三(1856)年に伐採の下請けをしたことだった。現場は下手稲星置の沢で、運搬先の発寒まで木材を運び、何度も往復する一方、その近辺の気候や環境を調査したのだ。それから間もなく彼が最初に入地したのは琴似である。とはいえ、当時の地名やその範囲は今の琴似(西区)とは違い、さらに東寄り、ちょうどケネウシペツ川(琴似川の支流)の沿岸で、現在の宮の森小学校(中央区宮の森4条6丁目)のやや下手、まさに円山の麓となる。

そんな彼が、開拓三神を背負って札幌にやって来た開拓判官島義勇に神宮の地として奨めたのがまさに円山だった。そして同地を案内し、次のような御言葉を頂くことになる。

「蓋し、早山は傍近ぼうきんの山川を熟知する者で、即ち我が北海の主人である」

日本のどの神社も、その周囲を木々で囲った鎮守の森がある。今では五〇余種の落葉樹の老木が繁茂し、また境内にはスギ、ヒノキの針葉樹林がある。札幌市民だけでなく多くの観光客も訪れる名所となった北海道神宮。清太郎なくして今のこの景観はありえない。その選定でおかしな判断をしていけば、それからの発展や歴史は全く違ったものとなっただろう。明確なデザインや計画、指示がなく、そもそも江戸から明治へと激変した時代で、組織的にも安定感に欠け、手探りで進められた政治的状況下で、原始林が広がる札幌の自然環境で円山を適地と定めた慧眼には感服させられる。

彼は以後、篠路での忙しい毎日の中でも円山に関わり続けた。明治四(1871)年に神社の完成に伴う遷宮の祭典で、清太郎は猿田彦の赤い面(ひげを生やし天狗のような高い鼻をしたお面)を付け、御神体を先導することになる。それから毎年六月十五日の北海道神宮例大祭(札幌まつり)では先駆で参列し続けた。そしてここが自分が注目するポイントである。彼は年のせいで歩行が自由にならなくなった明治三十一(1898)年まで、この役割を果たして来た。この期間に、開拓使はすぐ側の「圓(円)山養樹園」で人々にカラマツの植樹を勧めている。成長が早く、有望な樹種であると判断し、苗圃でも植樹している。そんな環境で、清太郎がこの新たな樹種に興味を持ち、自分も植樹してみようと考えたとはありえない話ではない。篠路までの直線距離約12キロをものともせず、コツコツと、何らかの手段で苗木を運び続けたのではないかと想像している。

現在、清太郎が暮らした篠路の地に高さ12mほどのアカマツが残っている。住宅街の角地にある区画で、空き地となった狭い場所に屹立している。その周りは駐車場やアパートで、まるでどこからか飛んで来た種が芽生え、実生木として大きく育ち、開発の波を偶然かわしながら存在し続けた雑木のようにも見える。実際、その近辺を通る人もその木がいつの間にか伐採されていても、気づくことは少ないかもしれない。人間と植物が暮らすエリアが明確に分かれている今の社会では、そこは明らかに人間の暮らすエリアで、勝手に紛れ込んでいる不自然な存在に見える。それでもアカマツは逞しく生き残っている。それは清太郎の手植えで、樹齢は140年ほど。幹のかなり下でU字型になり、そのまま二手に分かれて生長し、太い枝が所々で暴れている。まるで清太郎自身の姿のようだ。

彼は意地張りの暴れ者で、独立心が強く、成人になると度々家出しては家族を心配させた。神仏の信仰心が篤かったがどうしても百姓が好きになれず、とうとう二十八歳の時「お伊勢参り」を口実に家を出て、四国、九州、中国を転々としながら暮らした。京都にも数年滞在している。

四年後、実家の磐城(福島)へ戻り米商を営んだが、商機を誤り、深刻な損害を与えることとなる。家財も蕩尽してしまい、後のことを親類、知人に任せ、再び出奔した。彼は新潟に落ち着き、商人の下で働くことになる。やはり性に合わない生活だったのだろう。悶々とした日々を過ごし、先の人生について考えた。当時の男性の平均寿命は四十歳ほどだ。ちょうどその頃、蝦夷松前で福山築城工事が始まったと聞いた。彼の心に何か響くものがあったのだろう。

嘉永五(1852)年、意を決し、新潟から船で松前へ渡り、人夫として働くことになった。彼が後に琴似で米作りを成功させるのも、ここで稲作を営む者の様子を観察したからと言われている。だが、それも長続きしなかった。今度は漁業に将来性を感じ、轉身する。気力と体力はありながら、何か居心地が悪かったのか、飽きっぽかったのか、それとも一攫千金を狙っていたのか分らない。

安政二(1855)年、小樽にやって来た。そして盛んだったニシン漁に挑んだが、農家育ちの彼に漁師はなかなか務まらなかった。当時、漁業請負制での労働はとて厳しく、道内の漁場で毎年約一割の季節労働者が雇用契約期間中に逃げ出していたとも聞く。

結局資金もなく、独立することもできず、清太郎は張碓の漁場で菓子売りや毛皮商人の手伝いなどで糊口をしのぐことになる。やはりそれも続かず、星置で伐採の下請けをする。それ以後の話は、すでに述べた通りである。道内各地を廻り、ただ新天地でもこれだけふらついた生活であったことを考えると、命懸けで渡海した理由も、はっきりした目的があったわけではなかったかもしれない。何か漠然とした不安や自己逃避、そして野心や冒険心など、複雑な感情のもつれ合いが促した勢い任せの行動だったかもしれない。

彼が琴似で農業をやろうと決心した時は、すでに四十になっていた。何かを成し遂げるにはもう遅いと判断する者もいれば、決して諦めない者もいる。彼は荒井金助に出会い、開拓のために残りの人生を捧げようとして決心した。そして日々農作業に勤しみ、その合い間にも色々と社会的な貢献をする。豊平川に架かる豊平橋の落成式でも翁おきなの面(切顎になっているのが特徴の能面)をかぶり渡初わたつぞめをし*6、また島義勇だけでなく、入植したばかりの大友亀太郎*7の案内もしている。駅通の世話人、小学校も建てた。橋の造成も道路の開削も自費で行った。その生涯で25本の道路を作った。常に村の発展のため、人々のために活動してきた。

そしてその人生のハイライトは、明治十四(1881)年明治天皇の御来道の際に、札幌の豊平館で拝謁を仰せつけられたことだろう。その際に左大臣より賞状を賜り、お褒めのお言葉を頂いている。その方向性の定まらなかった気まぐれな前半生を考えれば、まさに夢のような出世話だった。

彼が篠路にカラマツを植えたのではないかと考える理由は、他にもある。明治十六(1883)年の火災である。彼はその時家を失っている。十一月六日の夕方、当時篠路駅通も兼ねていた自宅の風呂場から火が廻り、建物も古く、またたく間に焼け落ちたという。犠牲者は出なかったが、郵便物や書類、記録などが失われてしまった。

そして彼は突然、保養のため東京に出向くという届出を札幌県*8の駅通係に出す。それは多分口実で、実家へ金策しに帰ったのではと思われる。それだけ窮地に陥っていたようだ。家や

財産を失い、また家を再建しようにも材がない。清太郎の家は道をはさんで旧琴似川に面しているが、その川辺はすでに木が伐り尽くされていたのではないか。開拓時にそのような話はよく聞く。とにかく木が邪魔で伐り倒し、焼き尽くしてしまう。気がつけば、薪として利用するものまで欠いていた。琴似川とは、アイヌ名でケネウシペツ(ハンノキの多くある・川)だそうだ*9。和人が来る前は、篠路の旧琴似川沿いにも多くのハンノキが茂っていたかもしれない。それが粗方伐り尽くされてしまったのだ。その現実を目の前にして、今後の備えとして植樹しようとするのは理に適っている。今は篠路駅前通りとなっているその辺りは、開拓当初は人家のない静かなところだった。清太郎の家からは川沿いに700mほどの近さで、苗木の様子や面倒を見るのも簡単だ。家が建ち出すのは、昭和八年に札沼線の駅ができると決まってからだ。そこは明治中期から大正の間はカラマツが茂る小さな林のような状態だったのだ。

清太郎が亡くなってから、篠路の物語は次の世代に移る。明治二、三十年代に篠路村^{レツレツ}に入植した人たちは、官による支援もなく、粗末な家で厳しい自然環境に立ち向かうことになった。冷害、水害などに遭いながらも必死に生きのびた。明治三十一(1898)年には石狩川大洪水で多数の死者や行方不明者を出し、離村者も多かった。

そんな過酷な暮らしの中、その子どもたちが成人し、青年会を作り、活動を始める。彼らは毎年秋の収穫感謝祭の余興として歌舞伎を始める。それは単なるお遊びであった。また冬の農閑期に、若者たちが賭博や酒浸りになるのをやめさせるためもあったという。それが大沼三四郎という男だけは違った。後に初代篠路村長にもなる彼は、年に一度は上京し、本場の歌舞伎を鑑賞し、また雑誌やブロマイドを取り寄せて研究するほど熱心だった。稽古も本番さながらの厳しさと挑み、次第に周りも感化されるようになる。それは単なる余興から、地域芸能としては相当な水準まで鍛え上げられていった。

青年たちは農閑期に台詞を覚えようと必死で努力した。難しい言葉づかいなどを学ぶため夜学も開かれている。そして衣装、舞台も本格化し、皆が真剣に取り組むようになると、人々の間に一体感が生まれ、村の結束が強まった。祭りで上演される舞台には、遠くからも多くの人が訪れるようになった。劇団員は他村の若者も加わり、50人にもなり、やがては土別や幾春別など地方巡業まで繰り出すほどの実力となった。旧琴似川沿いの落葉松は、そんな篠路の一時代、明治から大正までの活気に溢れる時代の目撃者でもあった。

ただ昭和に入り、世情が変わり、娯楽の主役が映画やラジオなどになった。祭りの余興も歌舞伎ではなく映画が上映されるようになった。服装も和服を着ることが少なくなった。歌舞伎を演じて来た青年会のメンバーも年をとり、若者たちとの価値観が合わなくなり、また満州事変で出征する者もいた。土地の分け前を得られなかった次男や三男たちは次々と村を去った。劇団員の確保も難しくなった。いつの間にか篠路歌舞伎は忘れられていた。

そんな中、人々は鉄道の誘致を求めた。篠路が交通の要所であったのはどうの昔で、小樽と札幌に線路が結ばれてからは、水運を使った物資の輸送はほとんど行われていなかった。村民が札幌へ出るには遠回りな道しかなかった。しかも泥でぬかるんでいて、せつかく収穫した農作物を運ぶのにも難儀していた。

彼らは大沼三四郎を代表として、札沼線の誘致運動を始めた。その会合として人々が集まれる場所を作るということで、共楽館の建設が計画された。また娯楽の場としても必要だった。ただ

予算が足りなく断念せざるを得なかった。それを何とかしようと苦肉の策で考え出されたのが、落葉松の伐採だった。すでに村民の記憶では、なぜそこ(旧琴似川沿い)に大きな落葉松がたくさん育っているのか分らなかった。地元の古老が残した声でも、^{そば}側の道路でスモモを多く見かけたが、落葉松については何も覚えていなかった*10。当時は誰が植えたかなんか気にしていなかったかもしれない。とにかく建材として使えそうな大きな落葉松がたくさんあった。

やがてその太い幹に最初の鋸が入れられた。それは明るい未来を願い、村民の思いが一致し、始められたことだった。不安定な生活から抜け出し、人々が共に楽しめる施設を作ろうという一心だった。その半世紀前の明治十年代の篠路で、まだ人も少なく、自然が多く残り、熊に怯えながら暮らしていた当時、誰かが落葉松を植え続けた。圓(円)山で聞いた話では、すぐ活着し、成長が早いということだった。それでも材として信用できるか、この地でも適合するか心配だったかもしれない。もしそれが清太郎であれば、自宅が火事で焼けたことでなおさら自責の念は強かっただろう。もし材として使える立派な木があれば、わざわざ実家までお金を工面しに行くこともなかったかもしれない。しかし、彼が生きている間にそこまで生長することはなかった。やがて落葉松はどんどん大きくなり、立派な木となった。それが彼の死後、村民の決定によって伐り倒されることになる。離れ離れになった彼らの心を再び結びつけようと、その集まりの施設として建材に使われることとなる。

やがて札沼線の開設が決定し、篠路駅も建てられることとなった。工事が始められ、人々の表情にも明るさが戻って来た。同時に旧琴似川沿いの落葉松も伐採され、製材化されていった。共楽館の建設が始まり、大工たちの手によって、どんどんと骨格が仕上がっていく。そのこけら落としとして、篠路歌舞伎の看板役者、大沼三四郎(芸名花岡義信)の引退興行が二日間に亘って行われることが決まった。

昭和九(1934)年十一月二十日、篠路駅の開通式が催された。駅前や線路沿いに多くの人たちが日の丸の旗を手に、長い人波を作った。それまで札幌とは近くでありながら、交通の便が悪く、作物の運送で苦勞が絶えなかった。やがて定刻通りに黒い蒸気機関車が到着し、さらに一際大きな歓声が上がった。駅前には記念として5本のクロマツが手植えされた*11。

そしてその二日後の二十二日、今度は駅前通りに完成した共楽館に多くの人が集まっていた。地元だけでなく、札幌や石狩、その他地方からも客が寄せ掛けた。懐かしい顔がたくさんあった。プログラムはすべて本格派の演目である。観客席は立錐の余地もないほどに埋まった。午後三時、彼らの期待と共に幕が開き、記念すべき公演が始まった。しばらく舞台を離れていた大沼らは、最後を飾るにふさわしい熱のこもった芝居で応えた。引退興行の二日間、裏方や関係者たちは落葉松材が最後までもつか心配だったが、二階席を含め、多くの人々の情熱に支えられ、立派に役目を果たすことができた。そして舞台は、最後に『イヨオー、花岡座』の掛け声と盛大な拍手で幕を閉じた。すべての人が万感の思いだろう。そこには清太郎もいたかもしれない。少なくとも開拓初期に植樹し続けた人たちは存在した。過去も含め、村の人たちを一つに結びつけたのだ。

三十年近い篠路歌舞伎の活動期間で、多くの人々が舞台や芝居に協力し、また努力し、観客たちは仲間と楽しい時間を過ごしてきた。その以前の活気や賑やかさを取り戻すことができた。それは、確かにはかない夢のようにも思える。北海道に多くの人々が住みつく以前の悠久の年月を含め

れば、ほんの瞬^{まばた}き一つのような時間であったかもしれない。

その後、共楽館は娯楽施設として活用されることはなく、店舗、倉庫として利用され、昭和三十八(1963)年頃、出火によって焼け落ちてしまった。匿名の者によって植えられた落葉松の物語は、こうして終わりを迎えた。

今の円山公園には多くの木々が育っている。140年ほど前に養樹園ができ、外国産を含め多くの樹種が試され、その中でもカラマツは逞しく生き続けて来た。今でも当時植えられた大径木が残っている。園内は多くの市民や観光客が訪れ、憩いの場となり、秋にはきれいな黄葉を見せている。点在しているものも含め、その数は80本にも上るとい^{*}12。やがて北海道でも有用だと見なされたカラマツは、以後各地で植えられるようになる。林業でもトドマツと共に中心的役割を果たして来た。そのすべての始まりはここにあったのだ。

そして篠路でも、一人の男がコツコツとカラマツを運び、自分のお膝元、旧琴似川沿いに植え続けた。始められた当初は小さな行い、ささいな善行に見えただろう。気づく人も、誰にも記憶されることもなかった。だが多くの時間を経て、やがて大きな意義を得ることとなる。それは本人の思う形ではなかったかもしれないが、十分に満足のいくものだった。

実は篠路の旧琴似川沿いの保存林に今もカラマツが見られる。それは5mほどの背で、幹廻りも細く、他の木々に比べ、いかにも頼りなさ気だ。どのようないきさつでそこにカラマツが見られるか不明だが、その側で細々と流れる川と共に静かに時を過ごしている。

目の前の遊歩道は散歩する人も少ない。ただ木々はこれからも篠路で暮らし、その出来事や歴史を眺め、年輪に記憶として深く刻み込んでい^くだろう。いずれ誰かにその物語を語り伝えようとするかのように、延々と続く人々の営みと共にいつまでも。

【参考文献】

- *1：羽田信三編著：『シノロ～140年のあゆみ～』, p. 902
- *2：坂東忠明著：『カラマツが来た道』
- *3：若林功著 加納一郎改定：『北海道開拓秘録 [1]』, p. 36
- *4：道内の米作りでは、中山久蔵が明治六(1873)年に札幌郡月寒村島松で寒冷地米「赤毛種」の米作りに成功したことが有名だが、久蔵も清太郎の偉業に影響されたといわれる。
- *5：明治六(1873)年開拓使の大判官として着任し、不景気でありながら自ら範を示し、財政改革を試みる。2年で累積赤字を解消。誰にでも「さん」づけで語りかけ、アイヌの着るアッシ織を羽織って管内を巡回、「アッシ判官」として親しまれた。
- *6：明治四(1871)年四月、豊平川に初めて架けられた二連の丸木橋だが、僅かひと月足らずで、折からの雪融け水により流された。以来、橋と川との苦闘の歴史が半世紀にわたって繰り広げられることになる^{*}：さっぽろ文庫『札幌の橋』, 第2章 豊平橋より抜粋。
- *7：大友亀太郎は今の東区に御手作場^{おてさくば}(函館奉行所の直営農場)を開き、創成川の原型である大友堀を開削し、物資輸送や農業用水の確保に尽力した。札幌村の農業の基盤をつくったといわれる。
- *8：当時の北海道は開拓使が廃止され、三県一局制の下で札幌県、根室県、函館県、それに北海道事業管理局が設置されていた。
- *9：山田秀三著：『北海道の川の名』
- *10：羽田信三編著：『シノロ～140年のあゆみ～』, 森田国興翁のはなし, p. 704, p. 905
- *11：最近、吉田、真田両樹木医が樹木調査された駅前のクロマツは、その時手植えされた5本のうちの1本です。篠路の新たな始まりに関わる貴重な木なのです。
- *12：坂東忠明著：『カラマツが来た道』, p. 19～24

第4回 事例発表会に参加して

研修担当 阿部 正太郎 (12期)

北海道支部では冬期間を利用して、会員の活動、体験を発表する「事例発表会」を行っており、第4回目の発表会が令和2年2月14日(金)に「カデル2・7、10階会議室」で行われ、32名の会員が参加しました。今回はその概要などについて報告したいと思います。

発表者と発表内容は次の通りですので、スケジュールにそって、順次、発表内容の概要を紹介します。

発表の表題と発表者

| | | |
|-----------------|--------------------------------|---------------|
| 13:15 ~13:20 | 開 会 主催者挨拶 北海道支部長 豊田 栄 | |
| 13:20 ~14:00 | 札幌市中央区の路傍樹診断 | 樹木医 池ノ谷 重男 |
| 14:00 ~14:40 | 令和元年度「記念保護樹木」診断(野坂の黒松) | 樹木医 今田 秀樹 |
| 14:40 ~15:20 | 札幌・街の木観察つれづれ | 樹木医 細 縦 聡子 |
| 15:20 ~15:30 | 休 憩 | |
| 15:30 ~16:10 | 子どもの居場所として活用される厚真町学校林の調査・活用の検討 | 樹木医 崎 川 哲一 |
| 16:10 ~16:50 | 樹木の干害と日焼け ~2019年の少雨高温による異常乾燥から | 樹木医 真 田 勝 |
| 16:50 ~17:30 | 樹木の萌芽特性と活用事例 | 樹木医 清 水 一 |
| 17:30 | 閉 会 | |
| ※発表 30分 | 質疑 10分 | |

1 札幌市中央区の路傍樹診断 池ノ谷 重雄 (16期)

路傍樹というのは道路の出来る前から生えていて、何らかの理由で切られずに残っている木で、中央区に多く存在しています。大きな木が多く、殆どが道路と民地の境の微妙なところに立っています。この路傍樹122本の診断調査の発表です。

このうち伐採が必要な木は既に伐採されているので、やや危険であるが伐採に至らない木、ハルニレやケヤキなどシンボリックに貴重な樹木数本について、カルテや写真を基に容姿や健康状態、保全方法、今までの経緯についての発表でした。札幌市はこれらの大きなシンボリック樹木が現在の姿を損なうことなく、安全・安心に保全されることに留意しており、それに答えての容姿

や健康状態を明らかにして、その保全対策に重点を置いた発表でした。なお、池ノ谷氏は事務局として、発表会の準備に忙しいなかでの発表でした。

2 「記念保護樹木」診断（野坂の黒松） 今田 秀樹（25期）

“野坂の黒松”と呼ばれている北海道記念保護樹木1本の診断の発表ですが、記念保護樹木や黒松についての説明、由緒由来、立地場所、周辺の環境、土壌調査による土壌の状態、木槌打診やレジストグラフの結果、容姿形状、今後の管理（治療・施肥・剪定・日頃の観察と定期的な調査診断）など多岐にわたっての詳細な発表でした。特に、診断や発表にあたっては多くの文献を参考にされていました。

なお、今田氏は平成30年に「2018 北海道の巨樹・名木150選」を自費出版されましたが、それを載せた道新の一部を紹介すると、“美しく鮮やかなカラー写真に詳細な解説とデータが添えられ、資料として貴重で、眺めても楽しい一冊だ”となっています。未購入の人には是非、購入をお勧めしたいと思います。

3 札幌・街の木観察つれづれ 細縦^{きと} 聡子（16期）

事例発表会初めての女性会員による発表で札幌のいろいろな所に植えられている、様々な街路樹の写真による紹介でした。

不適切な切断位置によって枝の枯れ下っている木、車両接触によって受傷・欠損し、腐朽へ進行している木、旺盛に胴吹き枝・ひこばえが出ている木、幹株下部に心材腐朽・根株腐朽のある木、ビロード状の子実体（punkタータ）のある木などなど、木に対する労りの気持ちが感じられる発表でした。

また、郷土意識に関する市民意識調査の結果で「札幌の街が好き95.5%」、その理由として「緑が多く自然が豊かだから」などの紹介もありました。なお、日本樹木医会ビジョン2012の表紙を飾っている細縦さんのイラストを見せてもらいましたが、あまりの素晴らしさに驚きました。支部がイラストを必要とするときは、おおいにお役に立ってくれることでしょう。



事例発表の様子

4 子どもの居場所として活用される厚真町学校林の調査・活用の検討

崎川 哲一（26期）

厚真町は平成30年9月の胆振東部地震で特に甚大な被害を受けましたが、その復興とは別に子供達の居場所がどこにもないという問題もでてきました。このため町は子供達が冒険の森と名付けた厚真町学校林（自然の森）を居場所として活用できないか、その取り組みを始めました。

学校林（自然の森）を活用するためには、危険木などの診断が必要となり、支部は町からの意向を受け、ここを技術研修会の場として会員による樹木診断をすることにしました。崎川氏はこれらのことに深く関わっており、研修会の講師も務められました。この経緯や発表内容について

は「技術研修会報告」に記載されているので参照して下さい。なお、3月2日（月）北海道放送で“崎川樹木医活動状況”が放映の予定となっているようです。はっきりしたら事務局から案内がいくと思いますので、これを読む時には見ていることになると思います。

5 樹木の干害と日焼け ～2019年の少雨高温による異常乾燥から～ 真田 勝（8期）

令和元年（2019）夏、少雨と高温による異常乾燥が長く続き、エゾヤマザクラ・チシマザクラ・ツツジ類などいろいろの樹種に落葉と葉枯、葉焼け、変色などの被害、また、カエデやプラタナス等の幹に皮焼けなどの被害が出ました。これらの被害の写真による詳細な発表です。過去にも1984年には極端な少雨でしたが気温は低め、2008年には少雨と高温による異常乾燥などで被害があったということです。

また、令和元年は秋も高温が続き、紅葉が遅れ、落葉しない（離層組織が不完全）モミジなどが多く見られました。また、狂い咲きもツツジ類のほか多く見られたとしています。

なお、真田氏は林業試験場北海道支場時代に「乾燥によるグイマツ×カラマツ雑種F1の枯損」、「札幌周辺の天然生林分に見られた乾燥被害—1984晩夏の例—」などの文献を発表しています。

6 樹木の萌芽特性と活用事例 清水 一（17期）

シラカンバ（ダケカンバ）、ナナカマド等の根株や幹、太い枝、小枝から「萌芽が発生する・発生しづらい・発生しない」等の萌芽特性とそれに応じた剪定の良し悪し、剪定方法、生垣作り等の活用事例の写真による発表でした。

常緑針葉樹であれば伐根、幹、枝からの萌芽枝発生は無いので、将来の樹形を考えて剪定する必要がある。一方新しい枝が出てこない特性を利用して形を作ることが出来る。また、アオダモ、シナノキ、カエデ類、イヌエンジュ、ヤチダモ、エゾヤマザクラ等の樹種は根株からの萌芽は良好なので地上部を伐採して伐根だけで移植することが出来るというような発表でした。

これらの事例は試験研究機関に従事していた長年の実践の結果であり、大変参考になり、樹種による萌芽特性を知ることの必要性を感じさせてくれる発表でした。

以上が今回の事例発表会の私なりの概要ですが、発表会に参加して感じたことは、この発表会は“単に体験や活動を発表してもらうことによる知識や技術の取得だけでなく、この人はどんな発表をするのだろう、どのような質疑応答になるのだろうといった（参加者にとっては）興味深い場にもなります。また、質疑応答により発表内容がより充実したものとなり、参加者（同士の絆や親睦も深まります。さらには発表者が話し方や資料の作り方を工夫し、大勢の前で話す訓練ができる場にもなる”のではないかと思います。それだけに特異な珍しい事例の発表だけでなく、どこにでもある、ごく当たり前の事例発表も意義あるものと感じました。

最後に多くの人に参加し、いろいろな人が発表し、さらに充実した発表会になることを祈念して、そして、今回発表してくれた会員の皆様に感謝して報告とします。なお、今回は新しく会員になった4名（札幌2名、函館2名）の方々全員参加（懇親会も）しました。道東厚岸町の百海氏（9期）も遠くから参加（懇親会も）してくれました。

令和元年度 「北海道支部技術研修会」 報告

研修担当 阿部 正太郎 (12期)

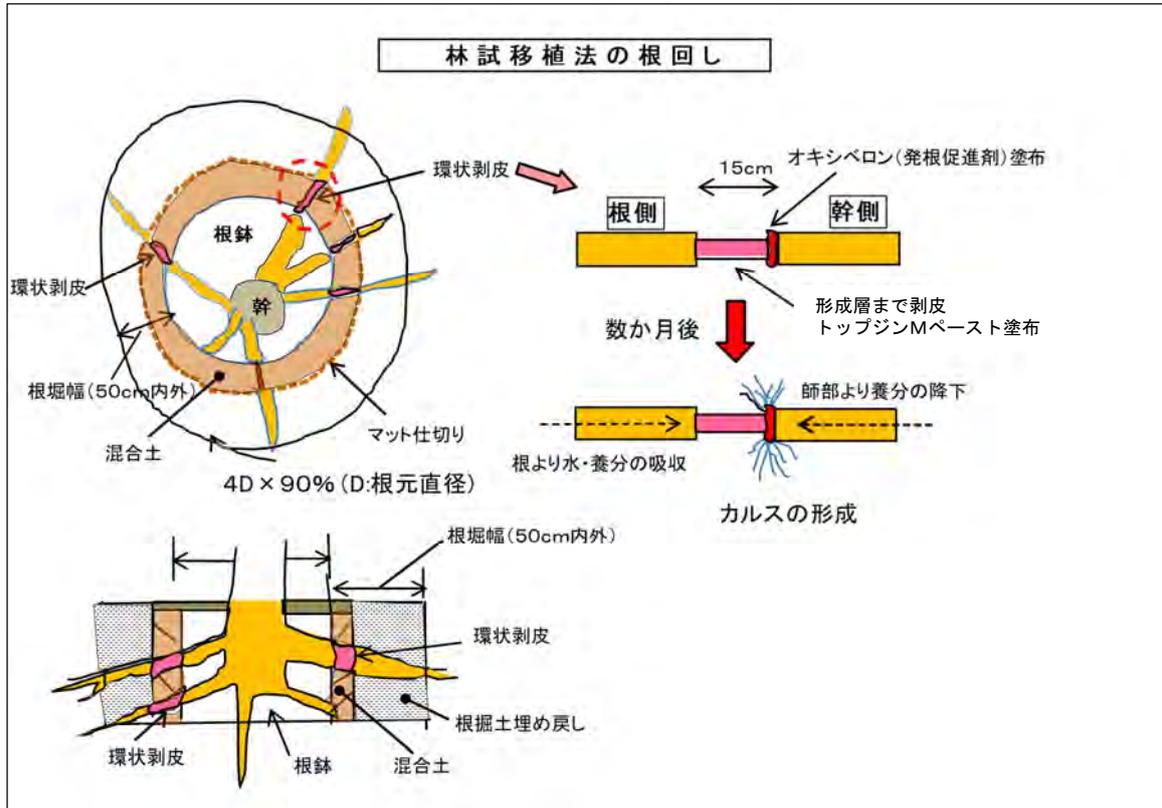
例年、秋に行われている支部技術研修会は、1日目は令和元年9月13日(金)に苫小牧市静川にある“苫東・和みの森”で、2日目・14日(土)は厚真町の“厚真中央小学校学校林”で行われましたので、あらましについて報告します。

第1日目 “苫東・和みの森”での「林試移植法による根回し研修」

ここは平成19年(2007)6月24日(日)に第58回全国植樹祭が盛大に行われた所で、植えられた大切な樹木は関係機関、ボランティア団体により維持管理されており、木育活動も積極的に行われています。なかでも樹木の移植については枯らすことが無いよう北海道支部の金田副支部長が携わってきました。また、全国植樹祭から13年目にあたる今年(2020年)の10月3日(土)には第44回全国育樹祭が開催されます。

このような所なので、ここを会員に見てもらいたいということも研修の場所選ばれた理由の一つです。

本題の「林試移植法による根回し研修」にはいります、理解し易いように、下手で恥ずかしいのですが、当日行われた根回し方法を図示しました。



講師は勿論、金田氏です、根回し対象木はそれぞれ根元径が 30 cm内外のエゾヤマザクラ 2 本とナナカマド 1 本の合計 3 本です。参加者 24 名が 3 班に分かれてそれぞれ取り組みました。



根掘り状況



根の環状剥皮

最初に根をなるべく痛めないように穴掘りです。穴の大きさ、深さは図の通りですが、土の硬さなど木の植えてある場所に違いがあるので、各班の進捗状況にかなり差がでました。穴掘りはかなりの労力を必要としますが、あまり労力を感じないで上手に掘るのも熟練の技術と言えます。移植だけでなく、土壌調査等穴を掘る機会の多い樹木医に必要な技術です。

次に鋭利な刃物による形成層までの根の環状剥皮ですが、これも簡単にはいきません。やりやすい根とやりにくい根があり、太い根の方がつるりと綺麗に剥けました。

次に環状剥皮した部分にトップジン M ペーストを満遍なく塗り、幹側には細根の発生を促進するために、オキシベロンを塗布しました、これは期待感を込めての楽しい作業です。

次に環状剥皮した部分に混合土を充填するための仕切り板の設置です。今回はダンボールを使いましたが、根の形に合わせて切れ目を入れ、スムーズに仕切りが底まで届くようにしなければならないので、これも簡単にはいきません。

混合土には火山礫をベースにピートモス・もみ殻くん炭・パーライト等の資材を混合したものを使いました。

次に仕切り板（ダンボール）の外側に掘り上げた土を埋め戻し、上から満遍なく液肥を掛けて終了です。



仕切り板設置状況



混合土、埋戻し土の充填

自分で実際にやってみて、納得のいくまで質疑応答出来るのは技術研修会の良いところです。

なお、根回しした3本の木は4月上旬に全国育樹祭会場に移植するとのことですので、細根の発生状態を見ることが出来ますし、金田氏が写真に撮ってメールで送ってくれるとのこと。

今回の研修にあたっては北海道庁の全国育樹祭担当の皆様大変お世話になりました。10月の全国育樹祭には支部として出来るだけ参加したいと思っています。

第2日目 「厚真中央小学校学校林での樹木診断研修」

2日目は厚真町立厚真中央小学校学校林で行われましたが、ここで樹木診断研修が行われるのに至った経緯について、最初にお話しします。

平成30年9月6日午前3時に北海道は大きな地震に見舞われました。ブラックアウト等記憶に新しいのですが、中でも最大震度7の厚真町は甚大で悲惨な被害を受け、その復興は最大の課題となりましたが、そのなかで子供達が安全・安心に過ごせる居場所がどこにもないという別の問題もありました。この対策の一つとして町は厚真中央小学校敷地内に『学童保育のための厚真放課後子供センター』を建てましたが、目の前にはコナラ・ミズナラを主体としてニセアカシアなどの混ざった自然の森（学校林）が広がっており、この森を子供達の居場所として利用できないかということになりました。そして子供達が“冒険の森”という名前をつけたこの森の活用に向けて取り組みが始まりました。

活用にあたって安全性の確保のためには、危険木の診断が必要となり、その診断希望が支部に寄せられました。支部はそれを受け、ここを研修の場所として会員全体で診断をすることになりました。これが大まかな経緯です。なお、診断のためには森の中に皆で入って樹木を見て回ることになるので、診断だけでなく、森の活用法についても研修項目に加え、各自に考えやアイデアを出してもらい、それを取り纏めて支部の案として町へ提出することにしました。

この講師としては以前から町と関わりのあった崎川樹木医と研修担当の私（阿部）が務めました。

森の活用法については、参加者21名を3班に分け、班ごとに発表者を決めて、班全体の考えをそれぞれ発表してもらい、意見交換して、支部の考えとして取りまとめることにしました。

樹木診断については、「健全木、要注意木、危険木」の3つに分けて、出来るだけ道に沿って歩き、全員で意見交換しながら目視と木槌、鉄棒などにより診断していきました。なお、樹種・樹高・幹周等の一覧表や樹木ナンバーテープなどは崎川・吉田両樹木医が予め付けてくれていたので、効率よく多くの木の診断をすることが出来ました。

診断結果は、街に植えられた街路樹等と違い、森の中の木は枯れた木、腐朽、傷の木もありましたが危険木や要注意木は少なく、万一倒れたとしても、掛かり木になったり、人の立ち入らない所であったりと安全性には問題が少ないように思いました。



全員による樹木診断

森の活用法については、「森全体を公園のような所と自然状態を残す所などゾーン分けするのが良い」、「整備にあたっては出来るだけ子供達に参加してもらうのがよい」、「外部の協力が得やすいように完成したときの青写真を作った方がよい」、「樹木の位置図を作った方がよい」、「最初に散策路を付けた方がよい」、「切られた木はベンチ等に有効利用した方がよい」、「大量に発生しているニセアカシアの稚樹は早期に取り除いた方がよい」、「公園のようにするところには、立木を利用してブランコやハンモックなどの遊具、雨の日も利用できるように東屋も欲しい」などのいろいろな意見が出されました。これらの意見は後日取り纏めて町の教育委員会に提出することになっています。



班ごとの発表会

なお、この研修会には厚真町教育委員会の担当者、ボランティアで来ていた函館教育大学の女子学生の方々も参加してくれました。また、子供達にも参加してもらって森の利用について、いろいろ希望を聞いたり、私達がどの様なことをするのか見学してもらいたかったのですが、あいにく土曜日でそれは出来ませんでした。

また、今回の研修会には長野県支部から原支部長が参加されました。

最後になりますが、子供達の居場所とし冒険の森が活用されること、そして一日も早く復興が遂げられることを願って報告とします。



第44回 全国育樹祭 北海道 2020

つなごう未来へ この木 この森 この緑

令和2年 10月3日(土)、10月4日(日)

全国育樹祭は、継続して森を守り育てることの大切さを普及啓発するため、昭和52年から毎年秋に開催されており、全国植樹祭で天皇皇后両陛下がお手植え・お手蒔きされた樹木の皇族殿下によるお手入れ行事や式典行事、参加者による育樹活動等が行われます。



育樹祭って何？
Check

33年ぶりの開催

昭和36年[1961]
「第12回全国植樹祭」開催
(苫小牧市・千歳市)



昭和天皇・香淳皇后によるお手植え

昭和62年[1987]
「第11回全国育樹祭」開催
(回会場)



皇太后同紀殿下(当時)によるお手入れ

平成19年[2007]
「第58回全国植樹祭」開催
(苫小牧市/苫東・和みの森)



天皇皇后両陛下(当時)によるお手植え

令和2年[2020]
「第44回全国育樹祭」開催

お手入れ行事 10/3(土)
〈苫東・和みの森/苫小牧市〉

式典行事 10/4(日)
〈北海道庁九一ノ森/札幌市〉

令和元年度 日本樹木医会北海道支部の活動報告

事務局

日本樹木医会北海道支部は、北海道に住所を有する正会員及び北海道支部の会員になることを希望する道外会員（一般社団法人日本樹木医会の会員）と賛助会員（緑化・造園関係者）によって構成されており、令和元年度現在の会員数は、正会員 63 名、道外会員 1 名、賛助会員 7 名（団体）である。令和元年度における支部の主な活動は、次のとおり行った。

1 日本樹木医会の行事に関すること

(1) 令和元年度一般社団法人日本樹木医会第 1 回理事会

令和元年 6 月 7 日（金）の総会に先立ち、富山県富山市「富山県民会館」で開催され、審議事項は通常総会における提出議案の内容の検討と確認であった。

(2) 令和元年度一般社団法人日本樹木医会定時社員総会

令和元年 6 月 7 日（金）理事会に引続き豊田支部長が出席した。全国から正会員 2,356 名中 243 名が出席、委任状 1,034 名で規定数を満たし総会成立。議事は平成 30 年度の事業・決算報告、令和元年度の事業計画・予算(案)等を審議し、原案どおり承認・議決され審議が終了した（ニュース 120 号参照）。

(3) 令和元年度一般社団法人日本樹木医会第 2 回理事会・第 1 回業務執行理事会合同会議

令和元年 8 月 3 日（土）東京都北区王子「北とぴあ」で開催され、豊田支部長が出席した。審議された主な議案は、人事に関する事項、理事会の運営、関係団体の活動状況報告、部会・委員会活動等についてで、各理事から出された要望や意見についての質疑応答が行われた。（ニュース 121 号参照）。

2 北海道支部の総会・役員会

(1) 総会

平成 31 年度北海道支部の通常総会は、平成 31 年 4 月 12 日（金）13:10～14:20、北海道立道民活動センター（かでの 2・7：札幌市中央区）で開催し、42 名（正会員 39 名、道庁・賛助会員等 3 名）の出席があった。総会では豊田支部長の挨拶に続き、来賓として出席された北海道水産林務部森林環境局森林活用課の原田政史課長からご挨拶をいただいた。その後、新会員の紹介に続いて議長に内田則彦氏（20 期）を選出し議案審議が行なわれ、平成 30 年度の活動報告と決算報告、平成 31 年度活動計画と収支予算（案）について原案どおり承認された。さらに、グリーンコーディネーター（10 名）の推薦について承認された。

また、その他として、豊田支部長から樹木医資格の登録更新制度の説明があり、質疑応答が行われた。

(2) 役員会

第 1 回理事会を令和元年 12 月 18 日（木）かでの 2・7 で開催し、冬期事例発表会や令和 2 年 4 月 10 日（金）の総会に合わせた講演会等について打合せ、協議を行なった。

第2回理事会はコロナウィルス感染症対策のため開催を中止し、令和2年度通常総会の議案等について、書面表決とした。

3 講演会・研修会

(1) 講演会

講演会は、平成31年4月12日(金)14:40~17:50、かでの2・7、1060会議室において、道総研フェロー 中田圭亮氏から「樹木の獣害」～野ネズミを中心に～、また、北海道支部理事 秋本正信氏から「樹木の病害」～診断と防除～と題して、お二人の講演をいただき、会員39名と札幌市・恵庭市・石狩市、北海道庁、北海道森林管理局及び造園関係機関等から32名、合わせて71名が受講した。

(2) 研修会

令和元年度の「技術研修会」は、9月13日(金)苫小牧市「苫東・和みの森」、14日(土)厚真町「厚真町立中央小学校学校林」で行った。参加会員は1日目24名、2日目21名で、そのほか長野県支部から原支部長が参加された。

研修概要は次のとおりである。

ア 1日目

金田副支部長による樹木の移植法や根回しの手順についての説明を受け、3班に分かれてそれぞれ「林試移植法」(根の環状剥皮)による根回しの実習を行った。

イ 2日目

厚真町教育委員会では、学校林を学童保育施設に通う子供たちの遊び場として活用するために、専門家としてのアドバイスを要請されていたことから、樹林としての活用をテーマに研修を行った。当日は、阿部研修担当理事と崎川会員による学校林の案内・説明により、3班に分かれて危険木の判定や活用方法を検討しながら踏査し、最後にそれぞれの班から活用方法等の発表を行い、参加者全員による意見交換がなされた。

なお、学校林の活用方法等については、崎川会員が取りまとめを行い、厚真町教育委員会へ提案することとなった。

(3) 冬期事例発表会

令和元年度事例発表会を令和2年2月14日(金)、かでの2・7、1010会議室において、会員32名(うち新会員4名)の参加者で開催した。発表者は、真田会員、今田会員、清水会員、細縦会員、崎川会員、池ノ谷会員の6名で、発表者と参加会員との間で活発な質疑応答が行われ、樹木医の技術と知識の向上が図られた。

4 行事・活動に関すること

- (1) 北海道支部会報「樹守」No.29を発行し、会員(正会員・賛助会員)と関係機関等へ配付した。
- (2) (公社)北海道森と緑の会のグリーンコーディネーター派遣事業について、会員の中から10名の推薦を行なった。
- (3) 森林総合研究所北海道支所一般公開における「樹木の相談コーナー」の相談員要請を受け、樹木医として6名の会員が参加し、8件の相談に応じた。(2019.6.22)

- (4) 日本樹木医会の会誌「TREE DOCTOR No. 26 外来生物の動向」を賛助会員7法人に配付した。(2019.6.17)
- (5) 「道民森づくりの集い2019」が北海道開拓の村で開催され、北海道支部として「樹木相談コーナー」を開設し、会員6名で4件の相談に応じるとともに木育活動を行った。(2019.9.8)
- (6) 試験研究機関や関係団体等が開催するイベントへの参加を呼びかけた。

1. 編集の目的

近年、貴重な樹木の樹勢回復と永く保存するため、樹木医の役割と活動は重要になっている。これに携わる樹木医相互の技術や情報の交換と、これらを事業としている人達との技術、情報の交換を行うことを目的に、定期的に情報誌を発行する。

2. 執筆者

一般社団法人日本樹木医会北海道支部の正会員、賛助会員、その他の関係者。

3. 発行回数

おおむね年1回とする。

4. 規格・体裁

表紙・裏表紙はカラー、本文は原則として白黒一色刷り、A4版とし、50ページ前後で適宜調整する。

5. 原稿の書き方

①原稿は原則として電子版とする。

原稿はA4版規格、体裁で編集するので、ワード原稿でメール添付またはCDなどで提出する。

②原稿の文字と規格

原稿の文字は常用漢字を用い、現代仮名づかいとする。

題字と執筆者のフォントはMSゴシック、本文はMS明朝を原則とする。

特別な字体を希望する場合は、画像として貼り付ける。

文字の大きさのポイント数は、題字は16pt、本文は10.5ptを原則とする。

③字数と行数およびページ数

1ページの基本体裁は、字数は一行43字、38行とし、余白は上下左右25mm。題名はセンターに、執筆者名は次行の右端に揃える。

図表、イラスト、写真などを入れる場合は、ゴシック体(8pt)でキャプションをつける。上下、左右1cm程度の余白を作る。

1課題4ページ以内を原則とし、最大でも6ページ以内とする。ページ番号は付けない。

④1文字あける場合

句読点、ハイフン、文の書き出し、改行のときは1字あける。

⑤用語、数字の使い方

学名や学術用語などは各学会の例によることとし、動植物や菌類の名称、外国の地名、氏名などはカタカナ、病名はひらがなを用いる。数字はアラビア数字を用い、学名は斜体文字とする。

⑥数値の単位

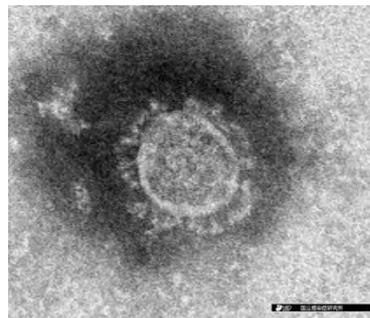
数値などの単位はC・G・S単位とする。(例 長さcm、重さg、広さm²、ha、時間s)

⑦本文を見やすくするため、大、中、小見出しを用い、見出しはMSゴシック体。

6. 原稿は編集者に電子版で送付する。随時受け付けし、毎年2月末日締切(厳守)とする。

《編集後記》

コロナウィルスの感染拡大が止まらない。北海道は雪まつりも終わり、日本中が中国からの春節の観光客の来訪を期待していたが、そこに降ってわいたようなコロナウィルスの登場である。最初のころは中国の武漢からの感染者の発表であったが次第に高齢者の死亡が伝えられるようになり、1 か月ほどの間に全世界に拡大してしまった。人類の歴史は感染症との戦いであった（朝日新聞 3月7日）。「感染症は狩猟採集時代には存在せず、農耕が本格的に始まり人口が増え、数十万人規模の都市ができると社会に定着するようになった。家畜を飼うことで動物由来の感染症が増えた（山本太郎・長崎大熱帯医学研究所教授）」そうで、今回もコウモリのウィルスが動物や家畜に感染し、それからヒトに感染、さらに人から人に感染したようである。過去、ペストは多くの人間を死に追いやり、コロンブス交換で持ち込まれた天然痘はインカ帝国やアステカ帝国の滅亡の一因ともなった（Wikipedia）。人間の移動がその原因拡大となっている。

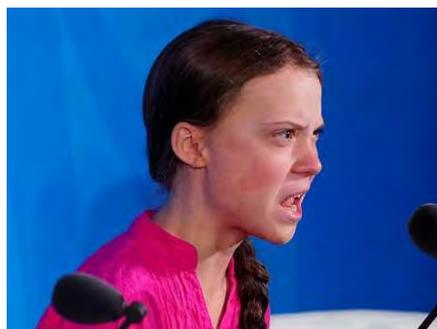


写真：国立感染症研究所

現在、世界がグローバルにつながっているということは速さと便利さを享受できる反面、悪影響も瞬間に拡大し、その影響はとどまるところ知らない様子を我々は今見ている。

世界規模で人の動きが止まり、経済活動が失速し始めた。株価は下がり、日常の生活物資類も不足し始めた。外出禁止で学校や幼稚園も閉鎖され、イベントや集会なども中止、自粛要請である。会社も出勤停止でテレワークになったり、自宅待機や一時解雇も発生している。観光業や飲食業などは経営が成り立たず、倒産の声すら聞こえてきた。感染・発症する人数の増減が、終息傾向にあるかどうかの判断基準のようであるが早く収まることを祈るしかない。

地球温暖化。昨年一人の少女が勇気をもって全世界に訴えかけた。その人はグレタ・トゥーンベリさん。彼女の主張は気候変動対策をなかなか実行しない全世界の大人に厳しい要求を突き付けるものであった。その発言に対しては批判的な声や反論も出ているが、今の地球規模の気候変動と災害の多発、発生規模の大きさ、崩壊しつつある自然環境などを見れば納得できる現象は多いであろう。



写真：FRONTROW

温暖化防止対策の実施には政治的・経済的な側面がかなり大きい為、日本や主要国は積極的ではない。しかしそのしわ寄せは確実に弱小国に及んでいる。

今から本腰をいれて取り組まなければ IPCC や彼女の言う通り、悲惨な世界が待つことになるのである。

彼女の「もし私たちが裏切るなら、あなたたちを絶対に許さない」の言葉が胸に痛く突き刺さったままである。（熊谷）

樹 守 (KIMORI)

令和 2年 3月 31日発行 通巻 29号

発行 一般社団法人

日本樹木医会北海道支部

住 所 〒064-0821

札幌市中央区北1条西21丁目3-35

株式会社 森林環境リアライズ内

電 話 011-699-6830

発行人 豊田 栄

編集人 熊谷 恒希

